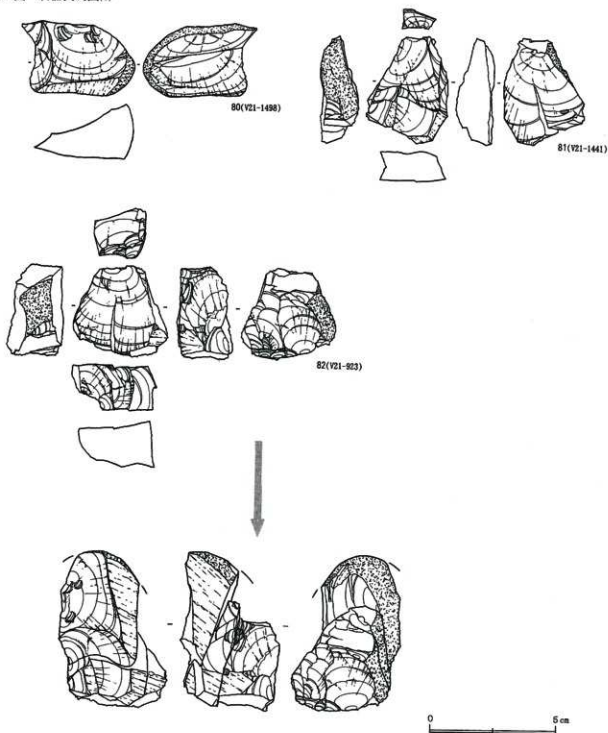


第23図 石器実測図(8)



って欠損する。素材は、正面に原石面が残る厚手の剥片で、打面は刃部加工によって除去されている。

刃縁は直線的で、剥離角は63°である。

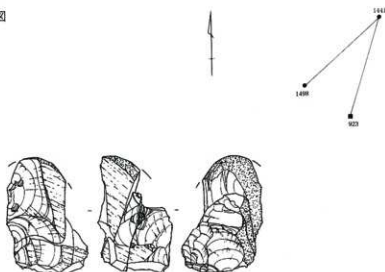
41 (V21-44) : 厚手の幅広剥片を素材とし、打面を取り除くように刃部加工が施されている。刃部は幅が

狭く直線的で、作りは粗い。縦断面は三角形、横断面は台形状をしている。

42 (S 24-199) : 上半部 (打面側) を欠損する。小形幅広剥片の端部に刃部加工が施されている。

43 (V21-1275) : 上半部 (打面側) を欠損する。正面

第24図 石器接合図



1421

0 1m

に原石面を残す、小形不整形剥片の端部に、刃部加工が施されている。

44(S23-153)：小形厚手剥片の端部に、刃部加工が施されている。

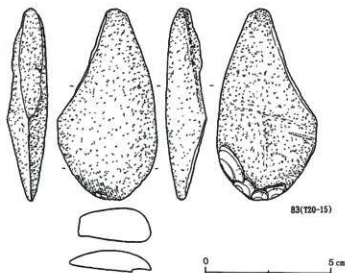
45(R24:02)：本遺跡では大形に含まれる横広厚

手の剥片の末端に、粗いが刃部状の加工が見られるので、掻・削器として分類した。

46(R21-86)：右側面上半部を欠く。長軸の一端に僅かに加工が見られるので、掻・削器として分類した。

47(V20-16)：上半部を欠損する。正面が原石面の厚手不整形の端部に刃部加工が施されている。石材は

第25図 石器実測図(9)



漆黒の黒曜石である。

48(V20-59)：上半部(打面側)を欠損する。小形不整形剥片の右側縁に、ノッチ状の刃部加工が施されている。

49(V21-641)：上半部を欠損する。左側縁に、僅かに刃部加工が施されている。

50(Q21-18)：硬質頁岩の縦長剥片を、あまり変形させることなく、右側縁に微細な刃部加工を施したものである。刃縁は僅かに凹状に作り出している。

該期の剥片石器のほとんどは、黒曜石が用いられており、一方、尖頭器は硬質頁岩製であるため、本資料が尖頭器石器群に帰属する可能性は高い。しかし、石器集中4からの検出であり、一応この項で扱った。

51(V20-12)：打面及び正面は原石面に覆われる、厚手横長の剥片を素材に用いている。刃部は剥片の末端に裏面からの1枚の剥離面によって、作られたコ字状の端部に、2つ方向から細かい剥離と微細な剥離によって、僅かに突起部を作り出している。播・削器と言うよりか鉞とした方が妥当かもしれない。本遺跡は他に、38と39に突起部が見られた。

剥片(第19・20・23図)

剥片石器のほとんどが黒曜石であるように、剥片もまた、ほとんどが黒曜石の小形のものである。そのため、図示したものは少ない。

全体を概観すると、石刃状の両側縁が直線的に整った縦長剥片は見られず、長幅比が1/2以上になるのは58ぐらいで、ほとんどは正方形から横広といった感じである。また、大きさに比べて厚いものが多い。

正面に原石面を残すものが多く、全面が原石面のものである。石核から推定して、本遺跡に持ち込まれている原石は、拳大より小形のもものが多く、当然の帰結かもしれない。正面の剥離面と主要剥離面の方向が一致するものと、90°異なるものとが見られるが、前者の方が多くようである。

打面は、単剥離面で大きいものと、原石面で小さいものの2つが見られる。

石核(第21~23図)

石核は形状から、黒曜石のものは5類型に分けられる。また、黒色頁岩の接合資料に石核が見られる。

・1類：盤状の礫又は厚手の剥片を素材に、横長の剥片を剥がしている(71~73)。

・2類：一見、船底状もしくは、角錐状石器に近似している。小形の縦長剥片を剥がしている(74)。

・3類：盤状の角礫を用い、上下から小形厚手の横長剥片を剥がしている(75)。

・4類：正面を作業面とする薄手で円盤状になる、一見求心状の石核に思えるが、打面は上位で、縦長剥片が剥がされている(76)。

・5類：角礫・重角礫を素材に、賽子に近い形状の石核で、縦長剥片を剥がしている。打角が直角に近いもの(77・78)と、鋭角になるもの(79)の2つがある。

82(V21-923)：円礫を輪切にしたもので、初期段階では原石面から直接剥がしているが、81(V21-1441)・82(V21-923)の時点では打面の作製及び打面調整が施されている。

その他の石器(第25図)

83(T20-15)：一見、篋・石斧の様に見える、小形扁平礫の長軸の一端に、平坦剥離と摩耗痕が見られる。

敲石(第26図)

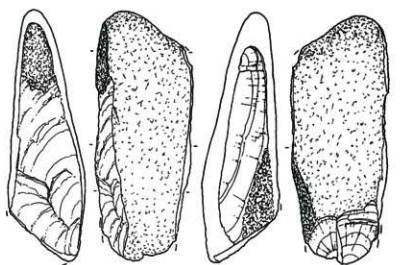
84(V21-158)：下半部を欠損する。扁平な砂岩の礫の両端を割り棒状にしたものが用いられている。表面は赤化し、一部にタール状の黒い付着部が見られる。一見、礫群の礫と見間違えるが、敲打痕は明瞭である。敲打痕は左側面先端部と、右側面下半部に見られるが、前者は使用痕、後者は整形痕の可能性が高い。

85(Q21-19)：掌にすっぽりとする大きさの、砂岩の棒状礫である。表面に赤化等の変化は見られない。長軸の一端に敲打痕が明瞭に観察できる。

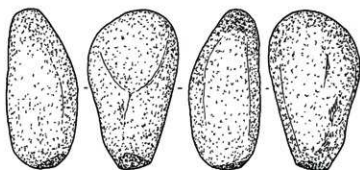
磨石(第27~30図)

磨石の数は、該期の特徴として比較的多い。また、89・90のように細かく破損したものが接合する例も見られて、出土状態から礫群の礫として、再利用された可能性も高い。全体に拳大からやや大きめの安山岩の円礫が用いられており、研磨が顕著なもの少ない。

第26图 石器实测图(10)

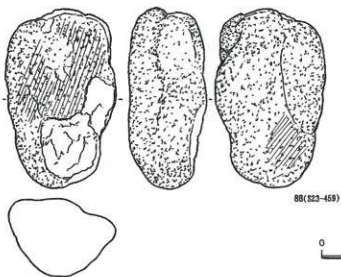
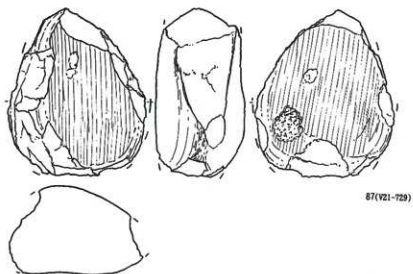
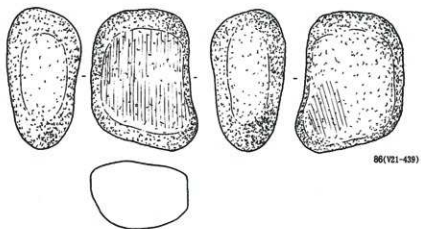


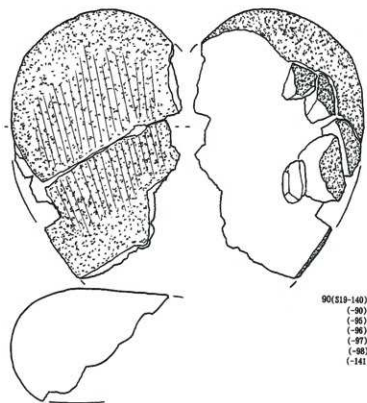
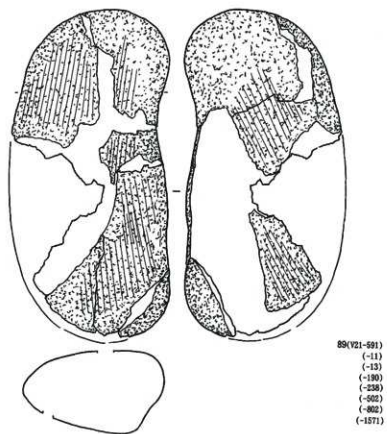
84(Y21-158)



85 (Q21-19)

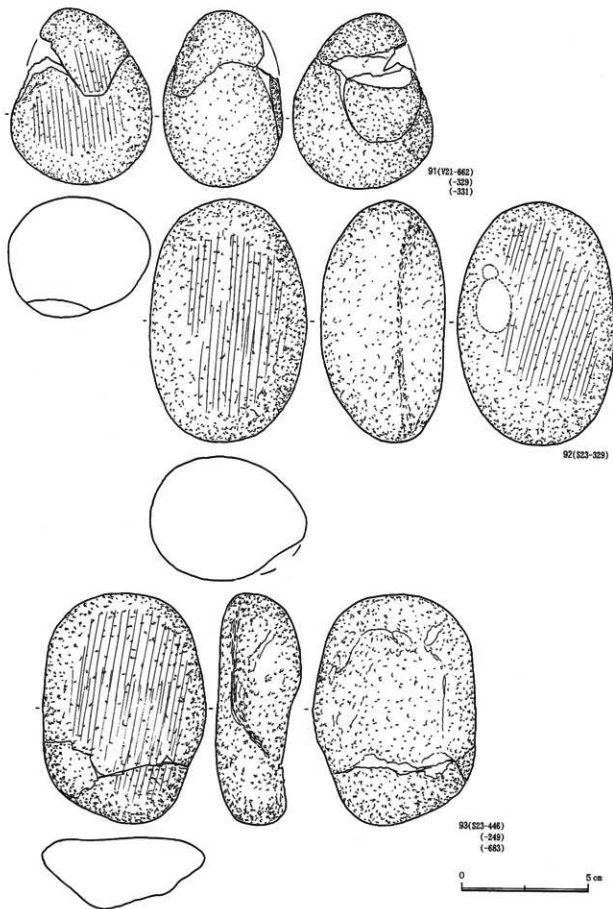




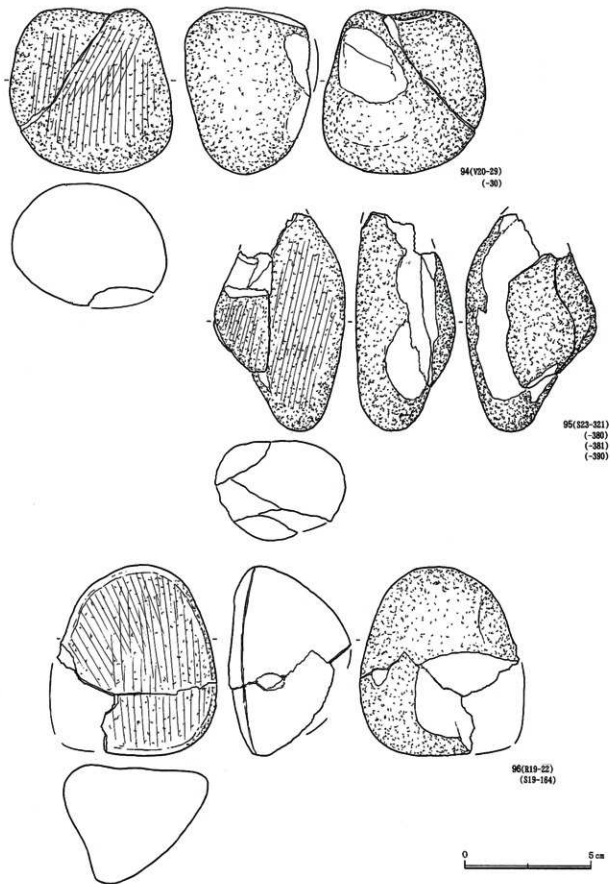


0 5 cm

第29図 石器実測図(13)



第30图 石器类测图(14)



5. 磨石の接合

本遺跡から検出された磨石は35点で、接合等によって形状が分かるものは、11点となった。接合した7例を、以下個別に見て行くことにする。

89 (第32図) は、石器集中1、V21グリッドから検出された。接合点数は8点で、全体の6割程度に復元できた。接合の分布状況は、502・238・591・802が東側で三角形に1mの範囲に分布し、それから西に2.5~3.5m離れて190・13・1571の3点が20cm程度に纏まり、その真北に3.8m離れて11が1点ある。形状は扁平の長楕円形で、正面と裏面に磨痕が見られる。

90 (第33図) は、礫群4の分布域、S19グリッドから検出された。接合点数は7点で、全体の4割程度まで復元できた。接合の分布状況は、1.2mの狭い範囲で95・96・97・98の4点を中心に140・90・141が接合した。磨石の形状は、楕円形の礫が用いられており、正面に磨痕が見られる。裏面はほとんど残っていない。

91 (第31図) は、石器集中1、V21グリッドから検出された。接合点数は3点で、ほぼ完形である。約70cmの三角形に分布している。形状は拳大で球状を

している。磨痕は正面のみに観察できる。

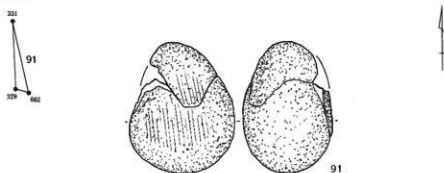
93 (第33図) は、石器集中6、S23グリッドから検出された。3点の接合で、ほぼ完形である。分布は約2.3mの直線状に3点が並んでいる。形状は扁平隅丸の礫が用いられ、正面の平坦面に磨痕が見られる。

94 (第33図) は、石器集中1、V20グリッドから検出された。接合距離は10cm程度で、ほとんど隣あつての出土で、ほぼ完形になっている。形状は拳大の球形で正面の湾曲した面に磨痕が観察できる。

95 (第33図) は、石器集中6、S23グリッドから検出されている。接合点数は4点で、ほぼ7割まで復元されている。接合は約70cmの三角形に分布している。形状は横断面が甲形に近い長楕円形礫の、比較的平坦な正面に磨痕が観察できる。

96 (第33図) は、礫群4の分布域、S19グリッドから検出された。2点の接合で8割近く、後1点あれば完形となりそうである。接合は1.2mである。形状は平面形が隅丸の三角形出、正面の平坦面に磨痕が観察できる。

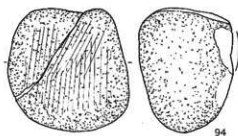
第31図 磨石接合図(1)



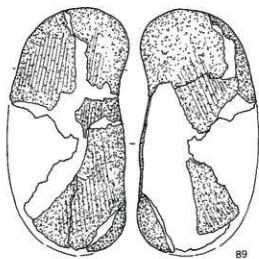
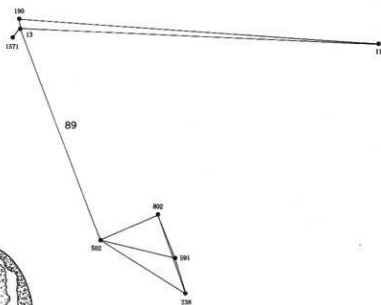
V21

第32网 磨石接合图(2)

30 94
29

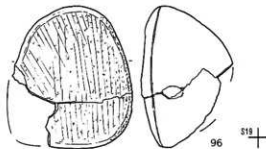
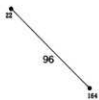
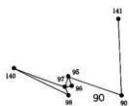
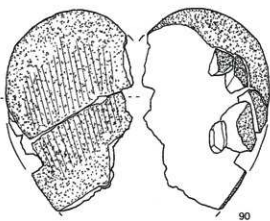
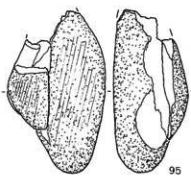
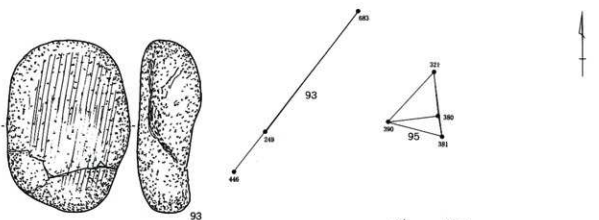


V20
V21



0 1m

第33図 磨石接合図(3)



6. 器種別分布

ナイフ形石器 (第34図)

ナイフ形石器の総数は29点である。その内、出土地点の明らかなものは、石器集中から17点、グリッドから6点の23点で、6点は古墳の周溝等の覆土から検出されている。

分布の概略は、谷近くのS21-16とR22-16グリッドの2点が他から少し離れて出土し、石器集中1～3のグループaの南側、グループbの石器集中5との中間地点から、U20-56・T20-5・T21-2・T21-1グリッドの4点が、石器集中外からの出土である。

各石器集中とも、点数の多少はあるが出土している。グループ単位で見ると、グループaは4点と少なく、石器集中で割ると1点弱になる。周辺からは、4点が出土しているが、纏まる傾向は見られない。

グループbは10点と纏まっている。特に、石器集中5は7点と多く、形態バラエティーが揃っている。

グループcは、石器集中6から3点出土している。

角錐状石器 (第35図)

本遺跡から検出された、角錐状石器は3点で、その内、原位置での検出は2点だけである。出土地点は、2点ともグループbの石器集中5から検出されている。原位置を離れた1点は、T20グリッドからで、グループaとの中間で、石器集中5と1グリッド離れた北側に位置している。ナイフ形石器、掻・削器等が調査区の体に分布するのは、対照的な様相を示している。

掻・削器 (第36図)

掻・削器は総数20点検出されている。出土地点の内訳は、石器集中から13点、グリッドから6点、その他1点である。

分布の概略は、点数の多少を別にすれば、調査区の全域から検出されているが、ナイフ形石器よりは、分布に片寄がある。

グループaは、石器集中1と2からそれぞれ3点、石器集中3からは1点出土している。

グループbは、石器集中5から5点出土し、その傾向として東西に2つの小グループが見られる。形態の特

徴は、器軸の一端に厚い刃部を有するものが多い。石器集中4から出土した(Q21-18)は石器の項目でも指摘したが、石材に硬質頁岩が用いられており、該期に含めるべきか問題がある。

グループcは、石器集中6の周辺から検出されているが、集中内からは出土していない。

石核 (第37図)

石核は、総数19点検出されている。その内訳は、石器集中から14点、グリッドから1点、その他4点である。

分布の概略は、各石器集中から検出されており、グループ間での数の片寄は少ない。

グループaは、石器集中1が4点と多く、石核は黒曜石のものは2類と4類が、黒曜石以外の石核(V21-923)は剥片と接合している。

グループbは、石器集中5から3点出土した。石核は、横広剥片を作出する1類と、縦長剥片を作出する5類が検出されている。

グループcは、石器集中6から3点出土している。その内、1類とした盤状の礫から横広剥片を作出する石核、2点検出されている。

敲石・磨石 (第38図)

敲石は2点、グループaの石器集中1とグループbの石器集中4から出土している。

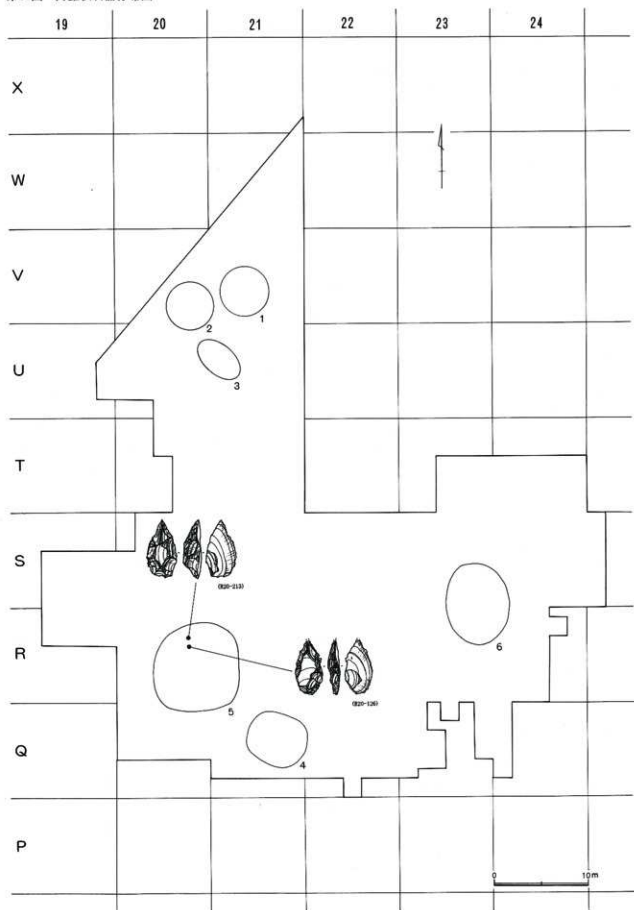
磨石は35点検出されているが、破損しているものが多く、接合等によって形状が分かるものは11点である。

分布の概略は、グループaとグループcから纏まって検出され、グループbに近接した、礫群4の分布域で破損品の接合が見られた。

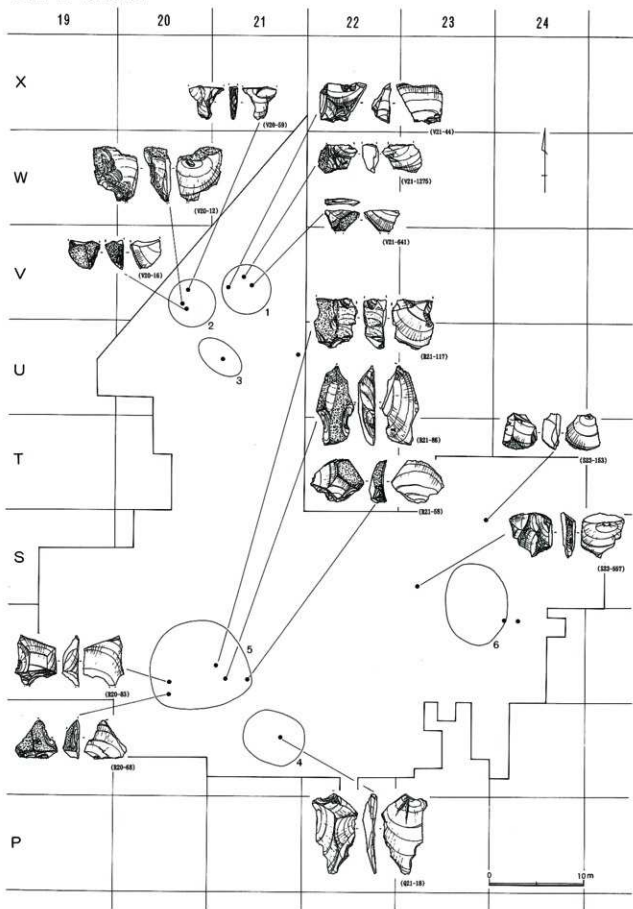
グループaは、石器集中1を中心に石器集中2から検出されている。89は細かい砕片が接合し、全体の60%程度まで復元できた。

グループcは、石器集中6から4点見つかり、内2点は接合資料である。

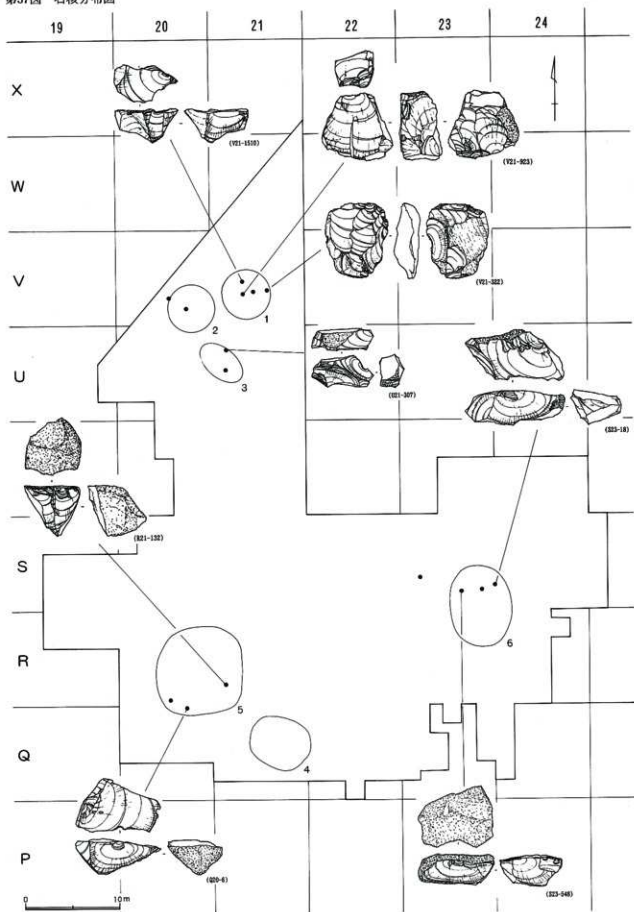
第35図 角錐状石器分布図



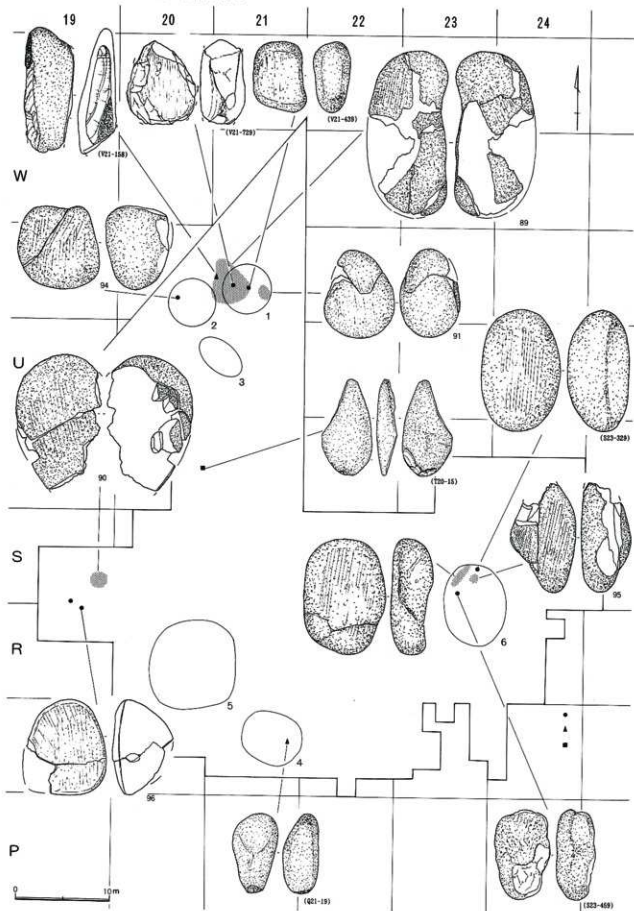
第36図 掘・削器分布図



第37図 石核分布図



第38図 敲石・磨石・その他の石器分布図



7. 礫群

新屋敷遺跡C区から、礫群が10基検出された。礫群の分布は、埋没谷の谷頭部を囲むように「U字状」に並んでいる。礫群の密度は、谷の最奥部より、その両側により密集した礫群が見られる。

石器集中同様、分布から3つのグループに分かれる。グループaは、礫群1～3の3基で、石器集中のグループaの分布域とはほぼ重複する。

グループbは、礫群4～6の3基で、石器集中のグループbの分布域と重なる部分もあるが、西側により広く分布している。

グループcは、礫群7～10の4基で、石器集中のグループcの分布と重複するが、石器集中の分布より、南東・北・東側に広い範囲である。

礫の総数は、3890点と多いがそのほとんどが小礫で、接合する資料は少ない。また、接合関係は礫群内で完結するものがほとんどで、礫群間での接合はほとんど見られなかった。

礫群1 (第39・40・65区)

V21-16・V21-22・V20-15・V21-11・V21-12・V21-13・V21-6・V21-7・V21-8・V21-1・V21-2・V21-3グリッドに位置する。本礫群と石器集中1の分布域は、ほぼ重複している。

礫の分布範囲は北東約7m、東西約6mと広く、密集する部分が3箇所に分かれる。ドット図では各纏まりの範囲が明確でないが、微細図を見ると3つの小礫群として捉えることができる。便宜的に小礫群に対し礫群a～cと呼称し説明をする。

礫群aは、最も大きく、V21-7・V21-12グリッドを中心とする纏まりで、礫は南北約3m、東西約3mの楕円形に分布する。礫の密集は南側に片寄り、北東側にやや散漫に広がっている。礫の大きさは他の小礫群と比べて大きい。

礫群bは、V21-16・V21-17グリッドに、南北1m、東西2mの横長の楕円形に分布する。礫の点数は少なく、散漫な分布である。

礫群cは、V21-11グリッドを中心に、径約1mの円

形に分布し、東側に大きい石が見られる。

礫の垂直分布を見ると、西から東に、谷に向かって緩く傾斜している、これは石器集中1の分布状況と同じである。


礫の総数は、1428点と本遺跡の中で最大規模である。石材組成は、チャート932点、砂岩341点、安山岩114点、ホルンフェルス36点、その他6点である。チャートが932点で全体の65%を占め、次に砂岩が341点24%、安山岩114点8%、ホルンフェルス36点3%、その他6点となる。チャートと砂岩の差は、2.7対1で他の礫群の石材構成と共通している。

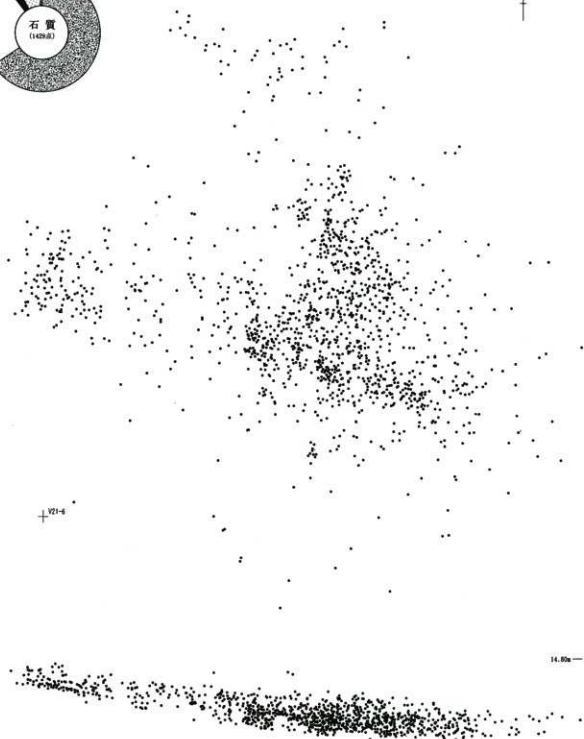
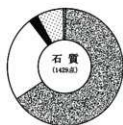
礫の大きさは、最大が285.52g、最小が0.02gであ

石材組成表

	チャート	砂岩	安山岩	ホルンフェルス	その他	合計
礫群 1	932	341	114	36	6	1429
礫群 2	20	30	3			53
礫群 3	361	102	43		8	514
礫群 4	91	66	24	2	2	185
礫群 5	31	19	2	2		54
礫群 6	63	16	11			90
礫群 7	77	12	42			131
礫群 8	78	39	21	1		139
礫群 9	540	228	58	14	2	842
礫群 10	93	54	5	2	4	158
合計	2286	907	323	57	22	3596

	チャート	頁岩	砂岩	安山岩	ホルンフェルス	片岩	合計
Q 20	1		3		1		5
Q 21	2		2	1			5
Q 22	2						2
Q 24				2			2
R 20	24		17	6		1	48
R 21	30		11	4			45
R 22	17			1			18
R 23	10		3	4	1		18
R 24	1		2	1			4
S 19	1		3	9	1		14
S 20	13	1	5	1			20
S 21	17		9		1		27
S 22	13		7				20
S 23	15		10				25
S 24	1		1				2
T 20	4		3	3	3		13
T 21			1				1
T 24	3			1			4
U 20	16		5		2		23
U 21	2		1	1			4
合計	171	1	80	34	7	2	295

石質	
	砂岩
	ホルンフェルス
	安山岩
	その他
	チャート

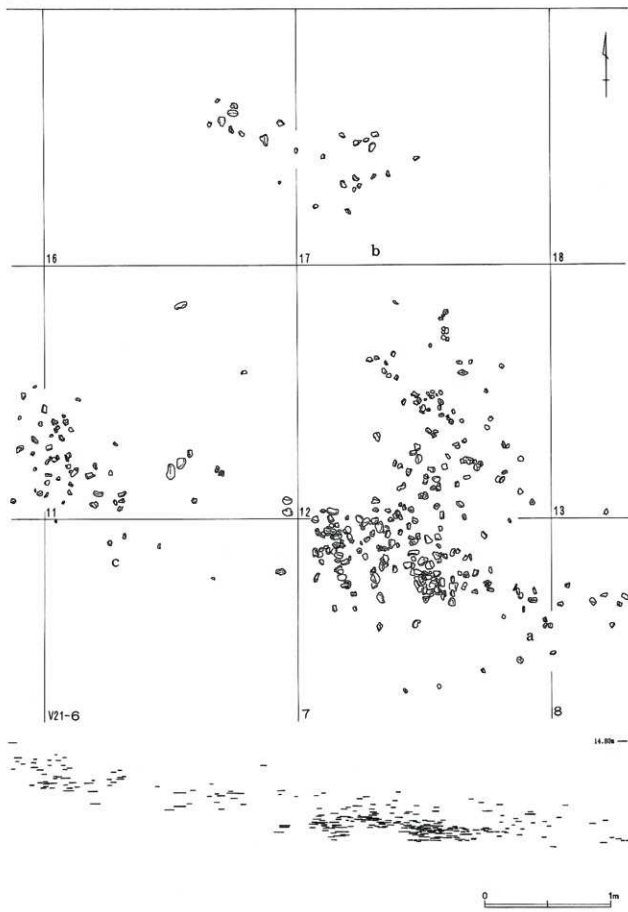


+ 921-4

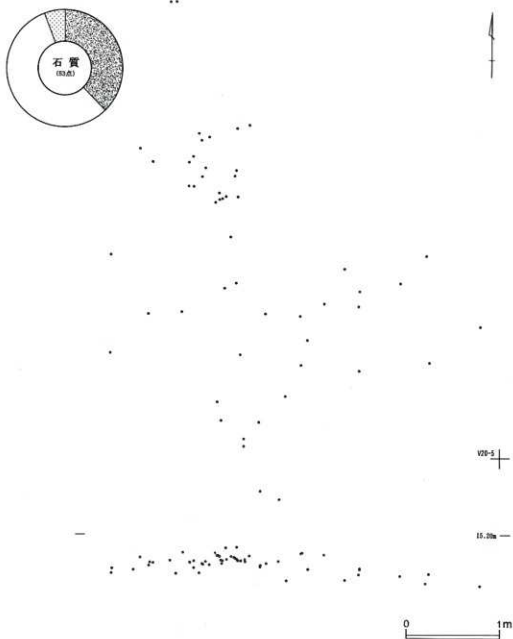
14.80m



第40図 礫群 I 微細図



第41図 礫群 2



る。ヒストグラムを見ると、10g未満が最も多く836点で59%を占め、20g未満が235点16%と大幅に減少して、続く30g未満が117点8%、40g未満が60点4%、50g未満39点3%と順次半減して行く。50g以降は目立った変化はなく、100-200gの礫が51点である。この傾向は礫全体の変動とほぼ同じである。

礫群 2 (第41・42・65図)

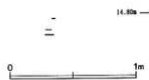
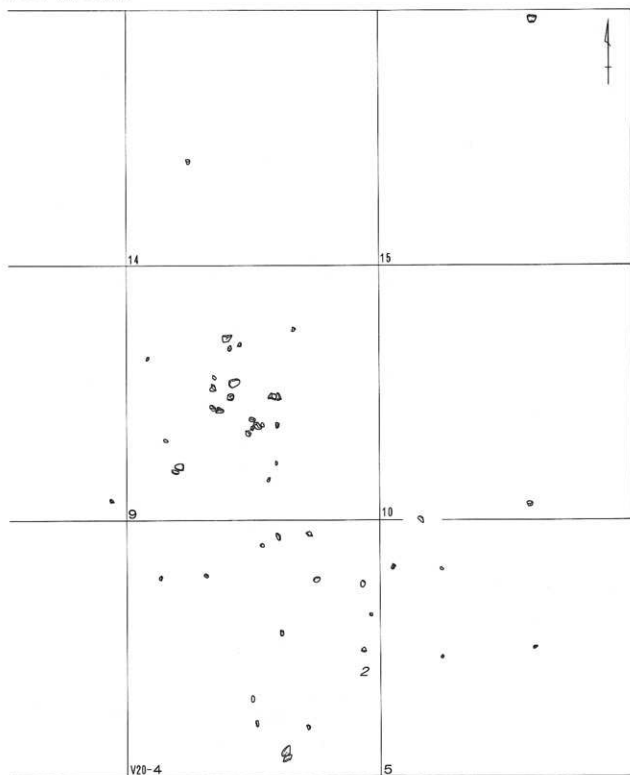
V20-8・V20-3・V20-4・V20-5・V20-9・V20-

14・U20-24グリッドに位置する。本礫群は、石器集中2の遺物分布と重複している。

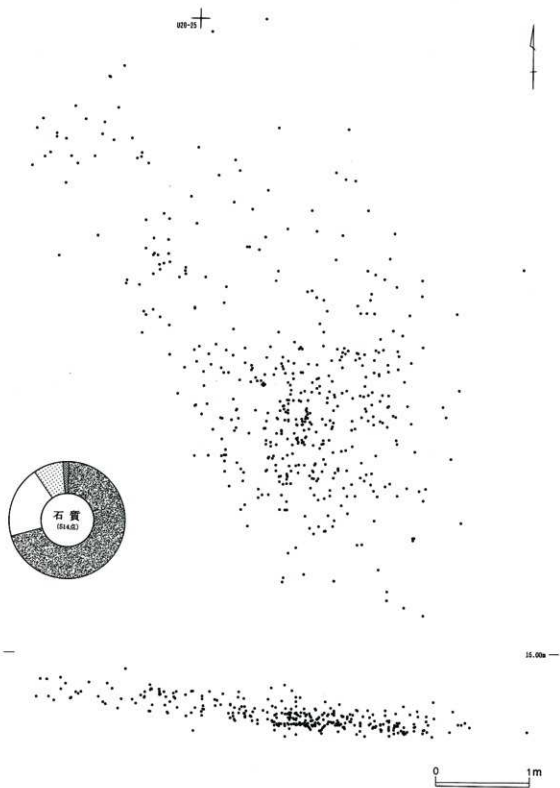
礫は南北約5.5m、東西約4mの範囲に散漫に分布している。微細図ではV20-9グリッドに、小さな纏まりが見られる。礫の垂直分布は、ほとんど水平で、石器集中2の傾向と一致する。

礫の総数は53点で、最も点数が少ない礫群である。石材組成は、砂岩が30点と最も多く57%を占め、続い

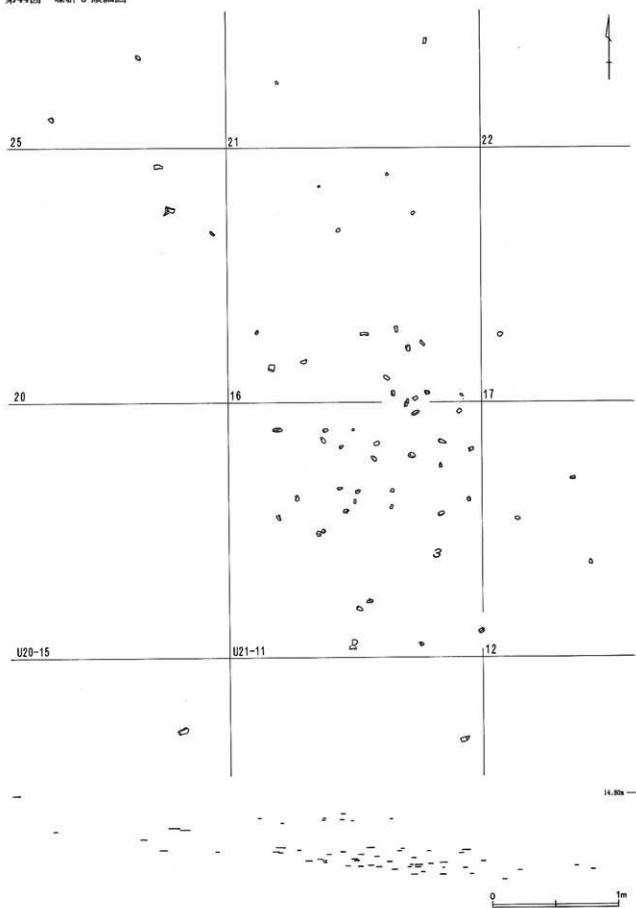
第42区 礫群 2 微細図



第43図 礫群3



第44図 礫群3 微細図



第45図 礫群 4



てチャートが20点38%、安山岩が3点6%である。砂岩がチャートを上回るのは、本礫群のみである。

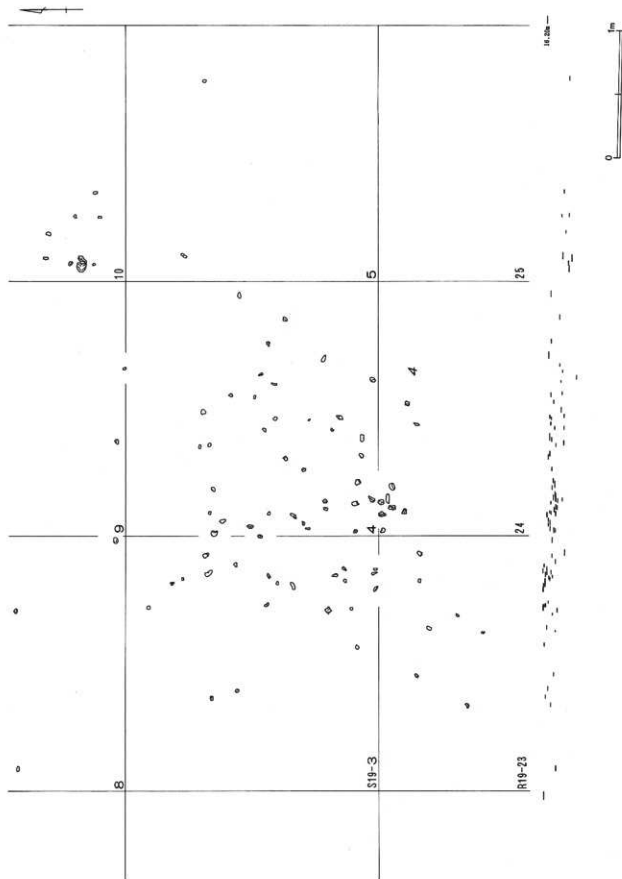
礫の重量は、最大が287.84g、最小が0.79gである。ヒストグラムを見ると、10g未満が16点と最も多いのは変わらないが、他の礫群と比較して、占める割合が30%と低く、続く20g未満が9点17%、30g未満が6点11%、40g未満が5点9%と、減少率は極端ではな

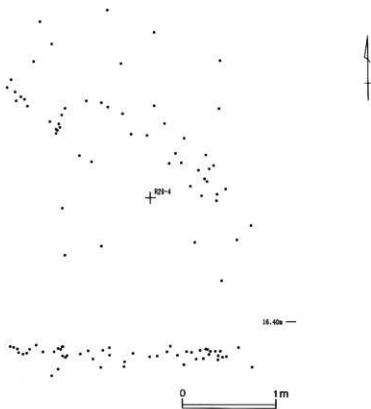
い。また、100g~200gが4点、200g~300gが3点と、大きめの礫が含まれる点は、礫群1と同じ傾向を示す。

礫群 3 (第43・44・65図)

U20-20・U20-25・U21-7・U21-11・U21-12・U21-16・U21-17・U21-21・U21-22・グリッドに位置する。本礫群は石器集中3の分布域と、ほぼ重複している。

第46図 磯群4 微細区





礫の分布は、南北約6m、東西約4mの楕円形に分布する。礫の密集度は高い方ではないが、微細図を見ると、U21-11・U21-16グリッドを中心とする纏まりがあり、それから延びるように北西側に広がっている。

垂直分布は、西から東に緩く、谷に向かって傾斜している。石器集中3の石器の傾向と同じである。

礫の総数は、514点と本遺跡から検出された礫群の中では、規模の大きい方である。石材組成は、チャートが361点で全体の70%を占め、続いて砂岩102点で20%、安山岩が43点8%、その他が8点である。チャートと砂岩の比が3.5対1と、点数が100点強の礫群6・7に次いで差が大きく、点数を考慮すると最も差があるといえる。

礫の重量は、最大が201.33g、最小が0.05gである。ヒストグラムを見ると、10g未満が327点で64%を占め、20g未満が114点22%、30g未満が40点8%、40g未満18点4%で、それ以降は1・2点である。礫重量の減少率は、他の礫群と比較しても極端である。本礫群は、チャートの小礫の集まりであったといえる。

礫群4 (第45・46・65図)

R19-22・R19-23・R19-24・R19-2・R19-3・R19-4・R19-5・R19-7・R19-8・R19-9・R19-10グリッドに位置する。本礫群は石器集中の分布から、西側に少し離れて存在する。磨石が接合する資料が2点、分布域に含まれている。

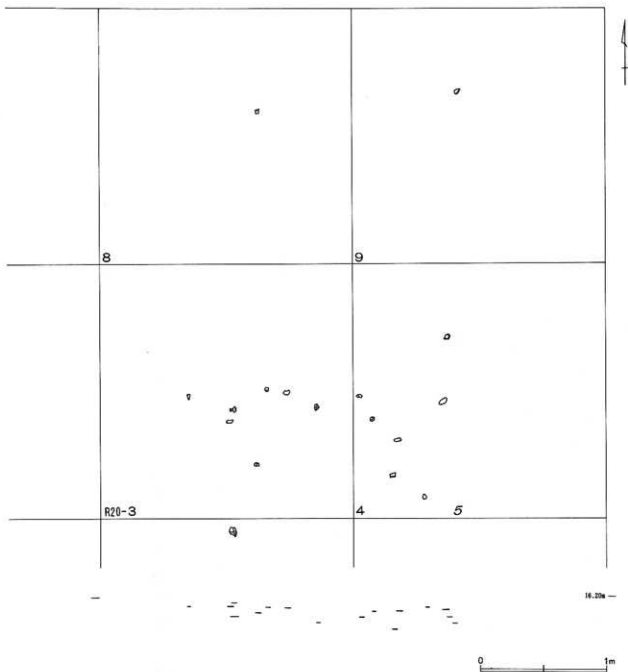
礫の分布は、南北約5m、東西約4.5mの範囲に、散漫に広がっている。微細図はS19-3・S19-4・R19-23・R19-24グリッドの纏まりと、北東に隣接するS19-10グリッドの纏まりが見られるが、規模は小さい。

礫の垂直分布は、谷から離れているため、ほとんど水平で、レベル差は少ない。

礫の総数は、185点と小規模で、石材の組成はチャートが91点と最も多いが、全体に占める割合は49%と半数に満たない。続く石材は砂岩が66点36%、安山岩24点13%、ホルンフェルス2点、その他2点である。チャートと砂岩の比は1.4対1と差は少ない。

礫の重量は、最大が94.12g、最小が0.17gである。ヒストグラムを見ると、10g未満が102点で55%を占

第48図 礫群5 微細図



め、20g未満が42点23%、30g未満が21点11%と急激に減少し、それ以降は点数が一桁である。また、大きめの礫は、70g~100gのものが無く、100g以上が3点と、礫の総数の割合に少ない。

礫群5 (第47・48・65図)

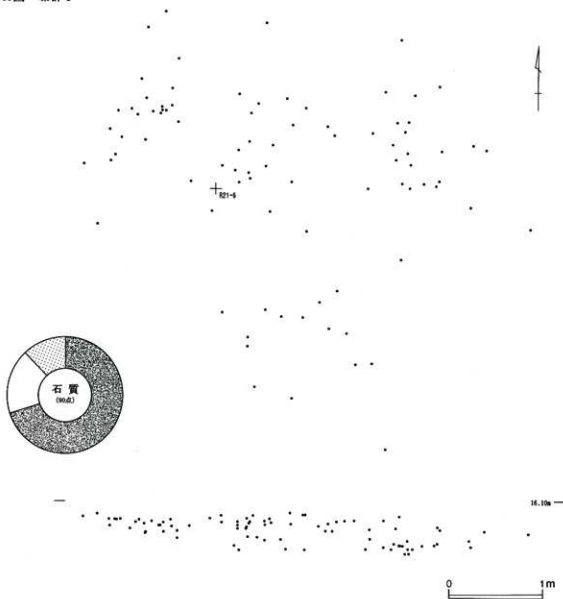
R20-3・R20-4・Q20-23・Q20-24グリッドに位置する。本礫群と礫群6は、石器集中5の遺物分布域に

含まれるように重複する。

礫の分布は、南北約3m、東西約2.5mの不整楕円形に散漫に分布している。微細図は、R20-3・R20-4グリッドに散漫な纏まりを示している。礫の垂直分布は、ほとんど水平である。

礫の総数は54点と礫群2の次に小規模である。石材組成は、チャートが31点で全体の57%を占め、続いて

第49図 礫群 6



砂岩19点35%、安山岩2点、ホルンフェルス2点である。チャートと砂岩の差は1.6対1である。

礫の重量は、最大が176.83g、最小が0.31gである。ヒストグラムを見ると、10g未満が25点で全体の46%を占め、続く20g未満が7点13%、30gと40g未満は5点9%である。それより重いものは、100g~200g未満の礫が6点含まれている。礫点数が54点と少ない点を考慮すると、数点の大きめの礫が置かれ(集められた)纏まりと考えられる。

礫群6 (第49・50・65図)

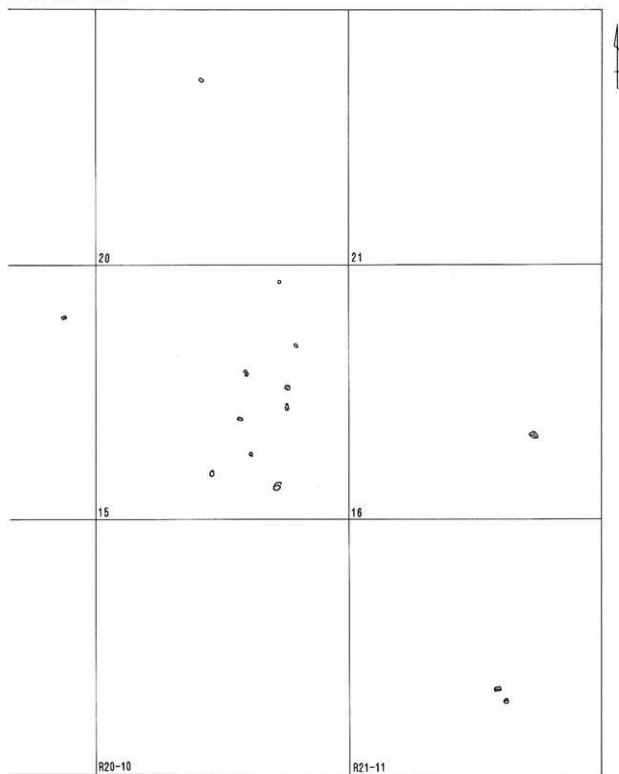
R20-15・R21-11・R21-12・R20-10・R21-6・R

21-7・R20-5・R21-1グリッドに位置する。本礫群は礫群5の北東側に隣接し、分布域を明確に切るのは難しい。ともに、石器集中5の遺物分布域に含まれるように重複する。

礫の分布は、南北約4.5m、東西約5mの範囲に散漫に広がっている。微細図はR20-10グリッドに小礫の纏まりを示した。礫の垂直分布は上面が水平であるが、底面は中心が下がりにレンズ状を呈している。

礫の総数は90点と少ない。石材組成は、チャートが63点で全体の70%を占め、続く砂岩が16点18%、安山岩が11点12%となる。チャートと砂岩の比は、3.9対1

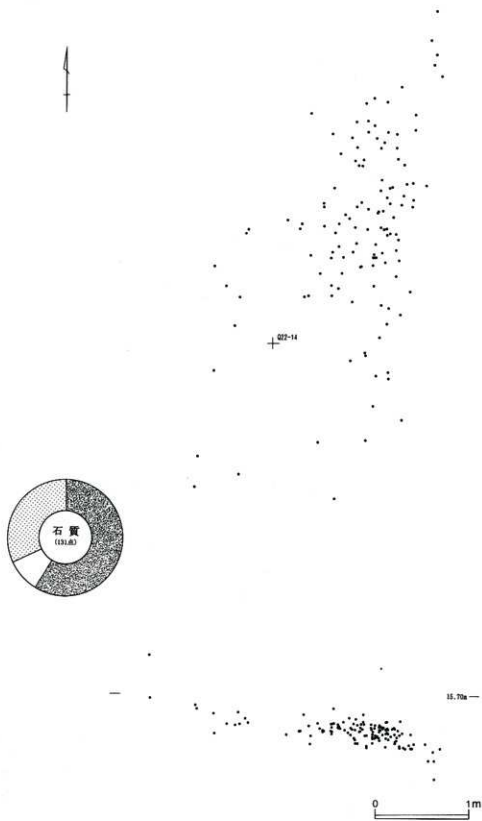
第50図 礁群6 微細図



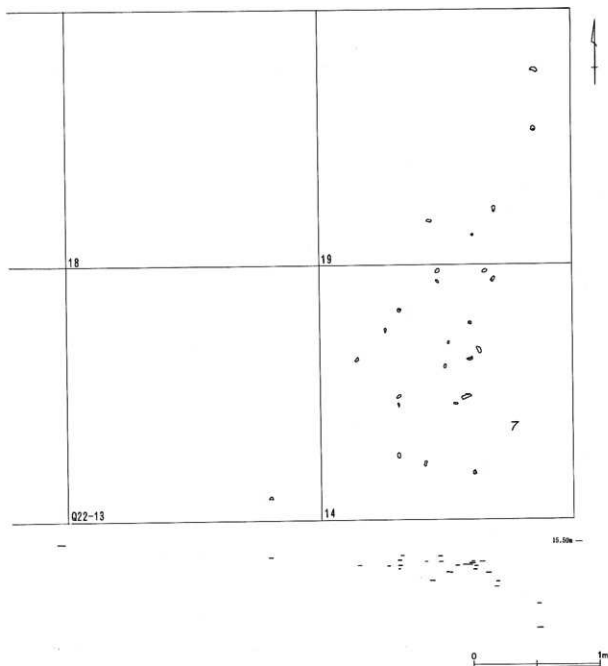
16.20a

0 1m

第51図 礫群7



第52図 礫群7 微細図



である。

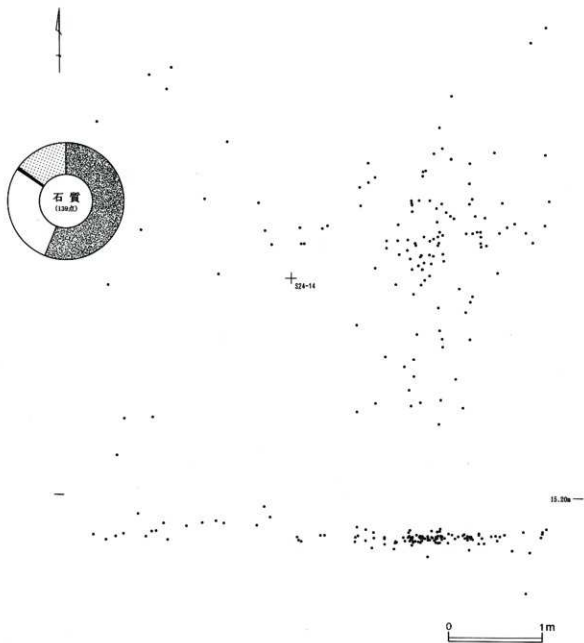
礫の重量は、最大が 49.22g と小さく、最小が 0.34g である。ヒストグラムを見ると、 10g 未満が 60% で 67% を占め、続く 20g 未満が 12% 、 30g 未満が 9% 、 40g 未満が 8% となり、 50g 以上の礫は見られない。小礫の纏まりと言った感じである。

礫群7 (第51・52・65図)

Q22-19・Q22-13・Q22-14・Q22-8・Q22-9グリッドに位置する。古墳の周溝によって、西側と東側が削平され、三角形に島状に残った部分に位置する。その為、礫群の規模等の細かいデータは不詳である。

礫の分布の現存する範囲は、南北約 5m 、東西 2.5m である。垂直分布は、上面が水平であるが、底面は西から東に傾斜(膨らんでいる)している。それが実際

第53図 礫群 8



の傾向か、残存状況によるためかは不明である。

礫の総数は、131点である。石材組成は、チャート77点で59%を占め、次に安山岩が42点と砂岩を上回り32%、砂岩が12点9%である。

礫の重量は、最大が62.14g、最小が0.62gである。ヒストグラムを見ると、10g未満が68点で全体の52%、20g未満が27点21%、30g未満が21点16%で、以降は一桁になる。また、70g以上の礫は無く、小礫の集

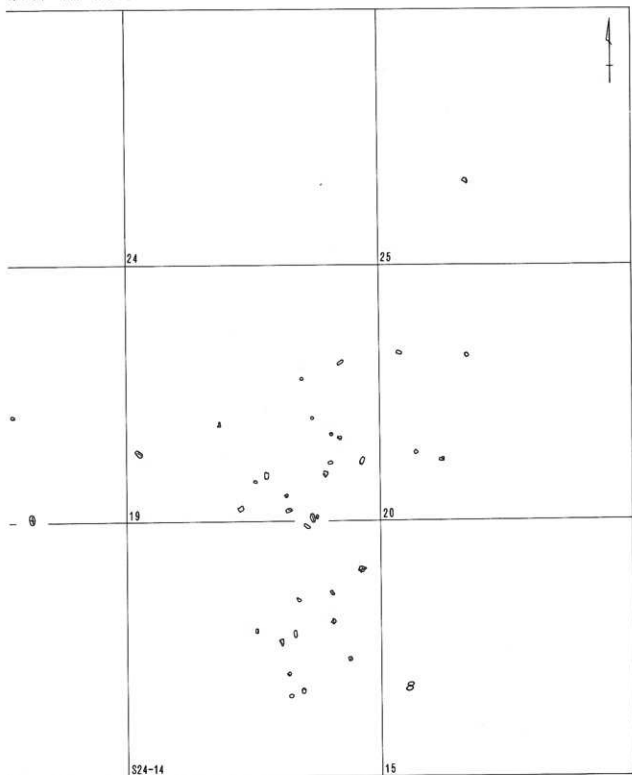
まりと言える。

礫群 8 (第53・54・65図)

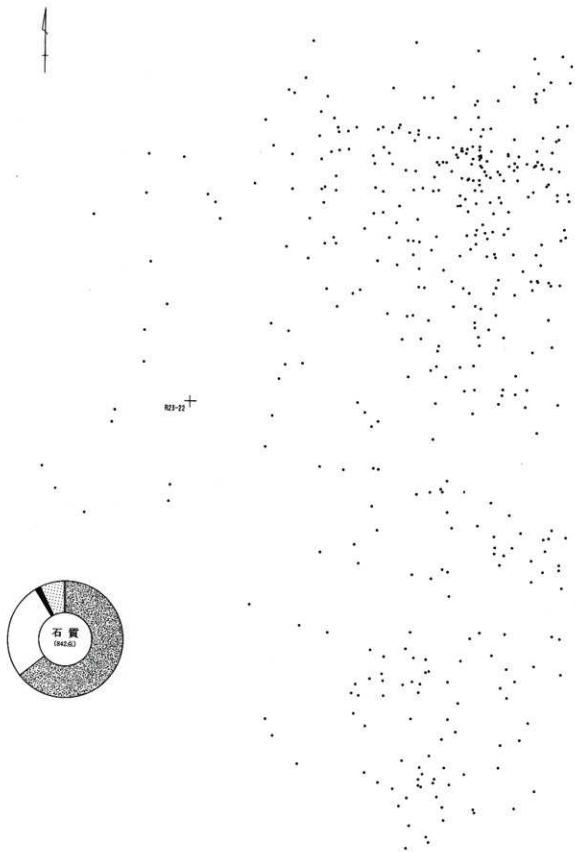
S24-23・S24-25・S24-18・S24-19・S24-20・S24-13・S24-14グリッド、調査区の最も北側に位置する。石器集中と分布の重複はしていない。

礫の分布は、南北約4.5m、東西約4mの範囲で、微細図のS24-14・S24-19・S24-20グリッドの纏まりと、それから西側に散漫に拡がっている。垂直分布は、

第54図 礫群 8 微細図

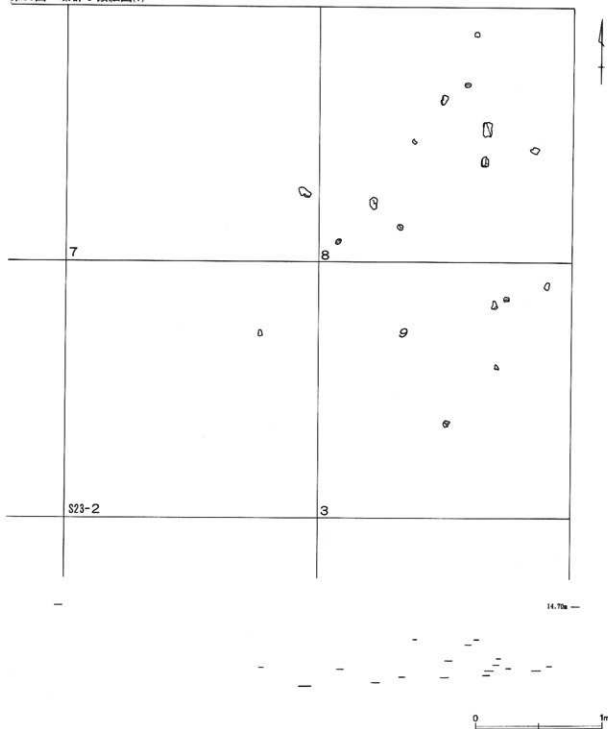


0 1m





第56図 礫群 9 微細図(1)



ほぼフラットであるが、僅かに西側に傾斜している。

礫の総数は139点である。石材組成は、チャートが78点で全体の56%を占め、続く砂岩が39点28%、安山岩が21点15%である。チャートと砂岩の比は、2対1である。

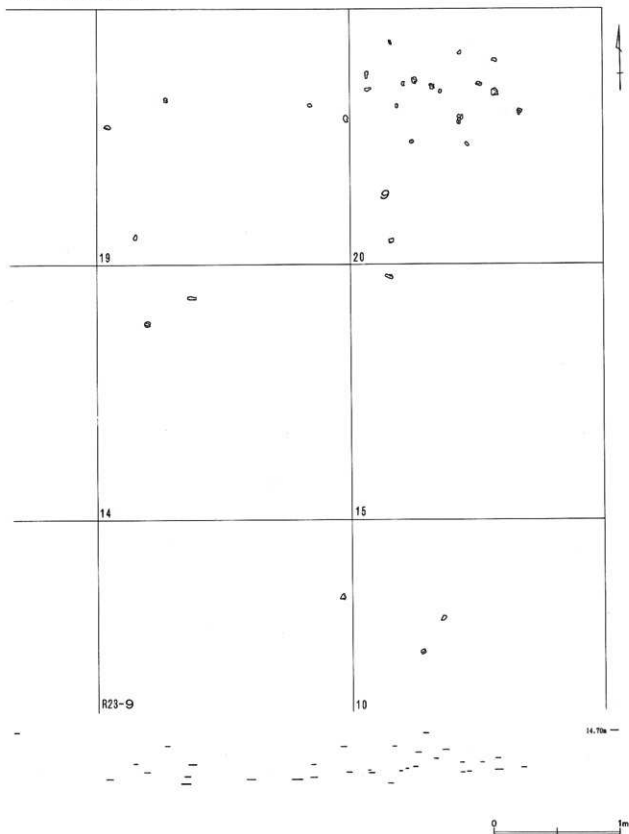
礫の重量は、最大が65.37g、最小が0.55gである。

ヒストグラムを見ると、10g未満が78点と全体の56%を占め、20g未満が42点30%、30g未満が14点10%と減少して、40g以上の礫は2点のみである。

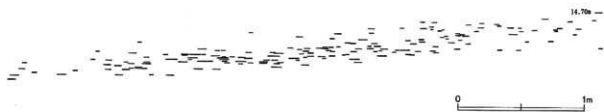
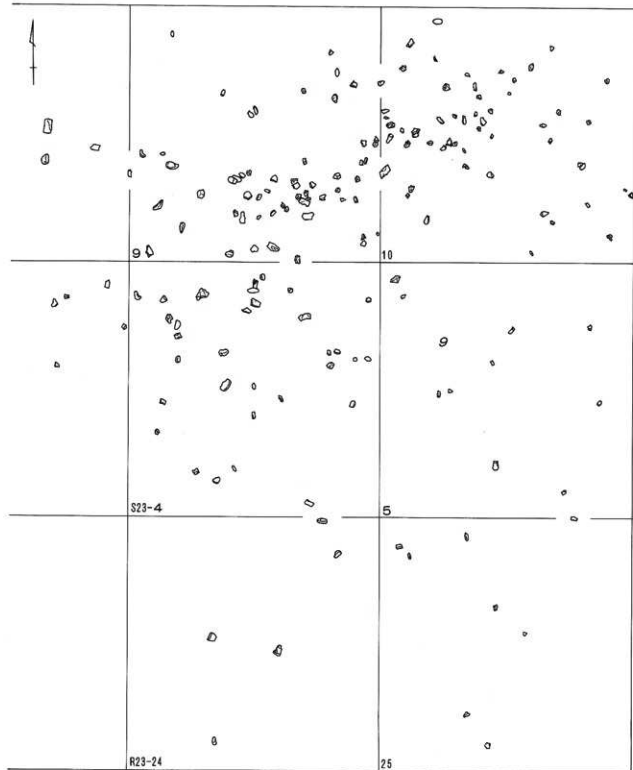
礫群 9 (第55~60・65図)

S 23-7・S 23-8・S 23-9・S 23-10・S 24-6・S 23-2・S 23-3・S 23-4・S 23-5・S 24-1・R 23-22・R

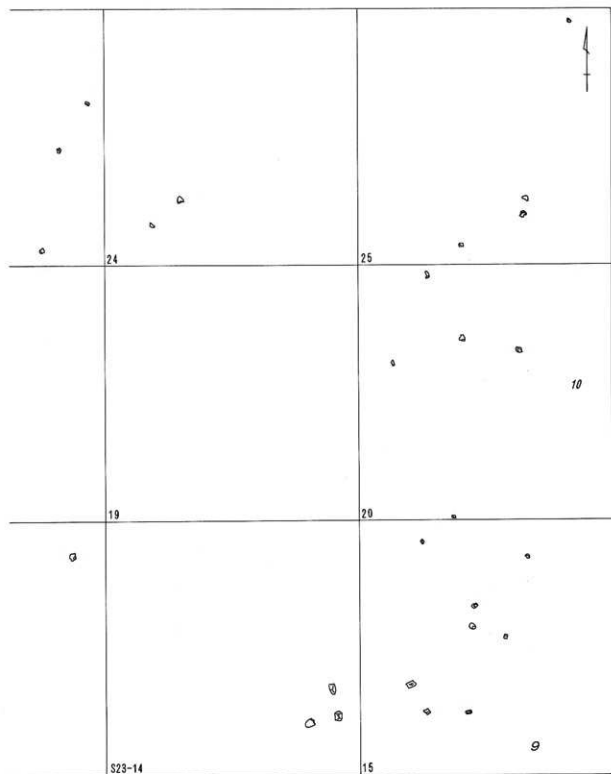
第57図 礫群9 後細区(2)



第58図 礫群9 微細図(3)



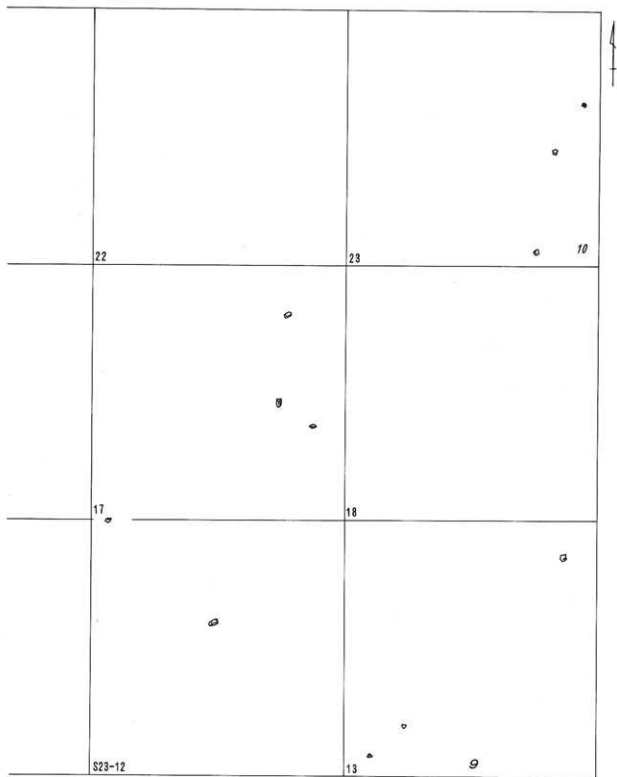
第59図 磯群 9・10 微細図(4)



14.70m

0 1m

第60図 標群9・10微細図(5)



第61図 磯群10



23-23・R23-24・R23-25・R24-21・R23-18・R23-19・R23-20・R24-16・R23-14・R23-15グリッドに位置する。本礫群は石器集中6の遺物分布と、ほぼ重複している。

礫の分布は、南北約9m、東西10mの広い範囲に幾つかの纏まりが見られる。微細図は、S23-4・S23-9・S23-10グリッドの纏まりを中心に、R23-20グリッドに小さな纏まりが見られる。また、北側に位置する礫群10とは分布の薄くなる部分で分離した。礫の垂直分布を、南北方向に見ると、上面はほとんど水平であるのに対し、底面は北に向かい僅かに傾斜している。その結果、礫のレベル差が幅をもつようになっている。

礫の総数は、842点と礫群1に次ぐ点数であるが、分布範囲等を加味すると、さほど密集度の高い礫群とはいえない。石材組成は、チャートが540点で全体の64%を占めている。続く砂岩は228点27%、安山岩は58点7%、ホルンフェルスが14点、その他が2点である。チャートと砂岩の比は、2.4対1で他の礫群よりは差が少いようである。

礫の重量は、最大が406.92gと、本遺跡では最も重い礫が出土している。最小が0.09gである。ヒストグラムを見ると、10g未満が422点で全体の50%を占め、続く20g未満が149点18%、30g未満が78点9%、40g未満が39点5%と順次半減するが、それより重くなると、点数はランダムになり、100g以上が45点見られるのは、他の礫群と比べて多いといえる。

礫群10 (第61・59・60・65図)

S23-22・S23-23・S23-24・S23-25・S24-21・S23-17・S23-18・S23-20・S23-12・S23-13・S23-14グリッドに位置する。本礫群は礫群9の北側に位置しており、石器集中との分布の重複は見られない。

礫の分布は、南北約4m、東西約9mの範囲に、3つの小さな纏まりが見られる。全体に礫分布の密度は低く散漫である。礫の垂直分布は、西側の谷に向かい、

僅かに傾斜している。西側の纏まりは、平面的に比較的高い密度が高く、出土レベルに差がある。中央の纏まりと東側の纏まりは、レベル差が少なく水平に近い上方をしている。

礫の総数は、158点である。石材組成は、チャートが93点で59%、砂岩が54点34%で、この2石材が全体のほとんどを占めている。他は、安山岩5点、ホルンフェルス2点、その他4点である。チャートと砂岩の比は、1.7対1とそれほど差はない。

礫の重量は、最大が131.59g、最小が0.23gである。ヒストグラムを見ると、10g未満が90点で全体の57%を占め、続く20g未満が42点27%、30g未満が12点8%と半減し、それ以降は点数が一桁になってしまう。本礫群が、小礫の集まりであったことが窺える。

礫の接合 (第62～64図)

礫の接合は、礫群内部で完結する例がほとんどで、礫群間、礫群とグリッド間での接合は、礫群9と礫群10の間で若干見られる程度であった。

礫群1は、479と接合し、平均は84cmで、最も離れたもので388cm、近いもので1cmである。

礫群2は、20と接合し、平均は107cmで、最も離れたもので270cm、近いもので5cmである。

礫群3は、17例の接合が見られ、平均は48cmで最も離れたもので198cm、最も近いものは接して出土している。

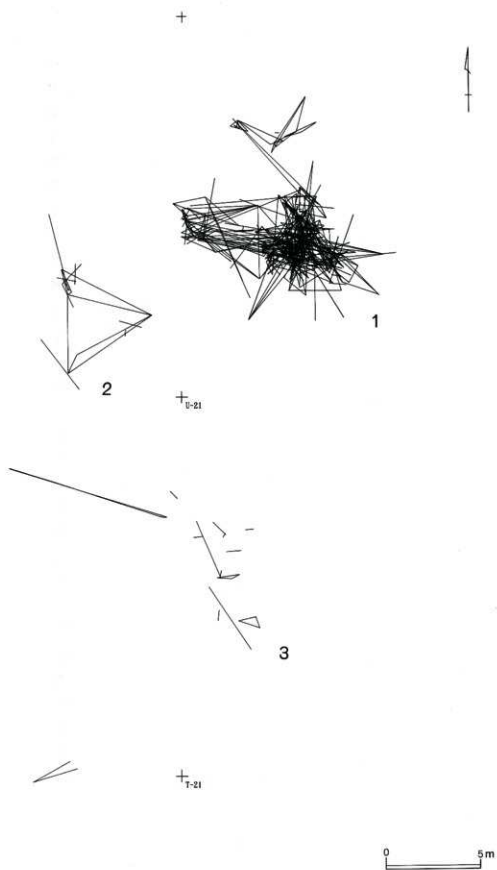
礫群5は、3例の接合が見られ、平均は208cmで最も離れたもので604cm、最も近いもので10cmである。

礫群6は、6例の接合が見られ、平均は70cmで最も離れたもので150cm、最も近いもので20cmである。

礫群7は、6例の接合が見られ、平均は57cmで最も離れたもので92cm、最も近いもので26cmである。

礫群9 (礫群10を含む) は、229例の接合が見られ、平均は206cmで最も離れたもので1076cm、最も近いもので2cmである。

第62图 継接合図(1)



第63図 継接合図(2)

+
1-20



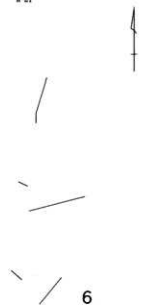
+

+
4-22



+

+
1-21

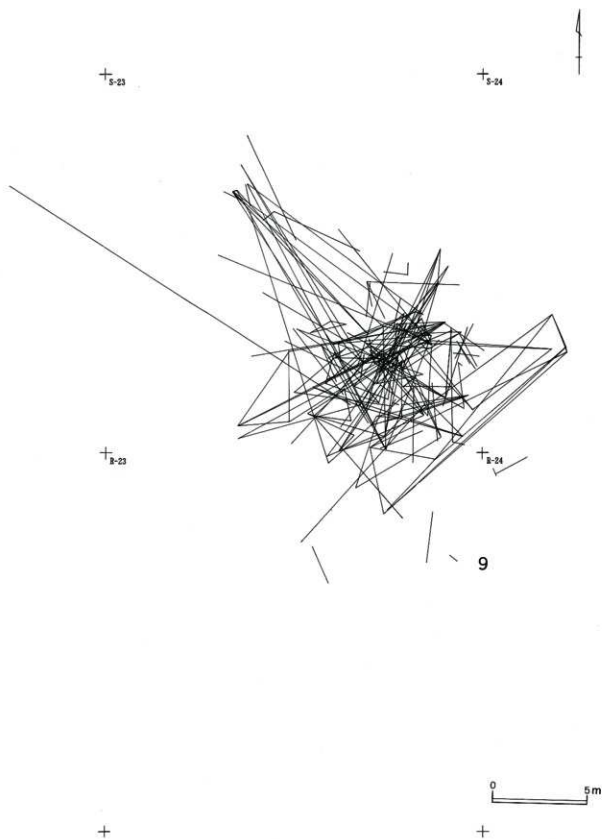


+ 0 5m

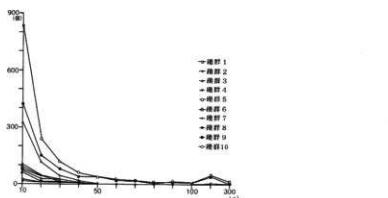
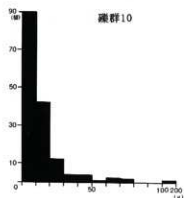
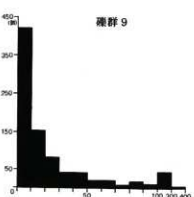
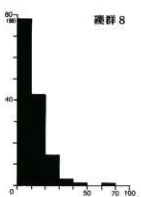
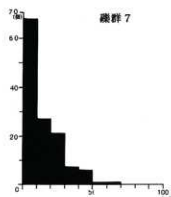
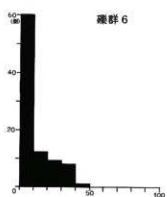
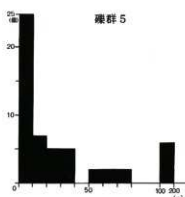
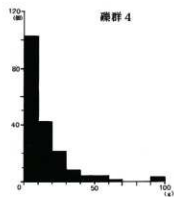
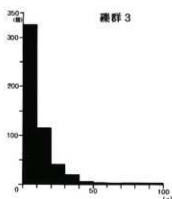
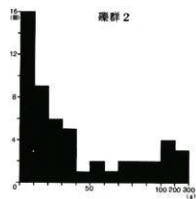
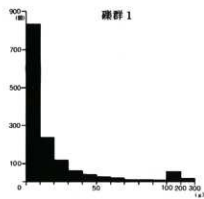
+

+ 0 5m

第64図 継接台図(3)



第65図 礫重量ヒストグラム



8. 尖頭器石器群

新屋敷遺跡C区から、硬質頁岩製の尖頭器3点が出土している。古墳時代以降の遺構調査の際に、硬質頁岩製の石核2点が出土しており、同一時期の可能性がある。

過去に、市教育委員会が調査した範囲から、尖頭器の石器集中が検出されており、該期の遺物は予想された。がしかし、今回の調査の主体は岩宿II期で、尖頭器石器群は単発的なものであった。

出土状況 (第67図)

先上器時代調査範囲から、散漫に尖頭器が3点出土している。S22-20は谷の中上方面から出土している。U21-2は石器集中2と3の中間から、R21-1は石器集中5の分布範囲内から出土している。いずれも、出土層位からは、岩宿II期石器群と分離するのは困難である。しかし、岩宿II期石器群に用いられている石材が、良質の黒曜石であるのに対し、尖頭器は3点ともに硬質頁岩が使われており、その石材は、石器集中4出土のQ21-18の種・削器のみである。

石器 (第66図)

1 (S22-20) : 基端に打面がくる縦長剥片を素材としている。外形は左側縁が「く」字状となり、右側縁が曲線的な左右対称形である。左側縁上半に素材剥片の端部の鋭利な辺が用いられており、一見、東内野型尖頭器に似ている。

調整加工は、裏面に素材剥片の主要剥離面を大きく残し、基端部周辺に、主に右側縁からの平坦剥離が施され、パルプの膨らみを除去している。正面の加工を見ると、右側縁は基端から先端まで平坦剥離により、左側縁下半部は急角度の細かい剥離によって側縁を内湾させるように行われている。

2 (U21-2) : 上半部を正面方向からの力によって欠損する。裏面上半部に、欠損面の細かい剥離が見られる。欠損後、何等かの目的で再加工を行う予定であったのかもしれない。

外形は、細身で左右対称になり、最大幅が基部中央にある、柳葉形をしている。素材は上位からの縦長剥

片が用いられており、裏面に主要剥離面を大きく残している。正面は左上半部に一次剥離面を残している。調整加工を見ると、裏面は周辺からの小形の平坦剥離が施されている。特に基端部右側は入念である。正面は右側縁は丁寧で、基部中央まで剥離が達している。一方、左側縁の加工は雑で、基端部付近は階段状になっている。

3 (R21-1) : 上半部を正面方向からの力によって欠損する。外形は小形で長さか短く、左右対称形になる。素材は下位の縦長剥片が用いられており、調整加工は周辺に裏面からの急角度の細かい剥離によって作られている。

4 (W27グリッド) : 作業面を正面にもつ単設打面の石核である。作業面の形状から、縦長剥片を連続して作出していることが窺える。

5 (X28表採) : 厚手の剥片を横に用いている。作業面は打面側から、剥片をスライスするように設定されている。作業面の形状から、作出されて剥片は小形の横広であったと思われる。

9. 縄文時代草創期の石器

縄文時代草創期のものと考えられる石器、石斧1点と有基尖頭器2点が出土しているが、一定の纏まりは見られない。

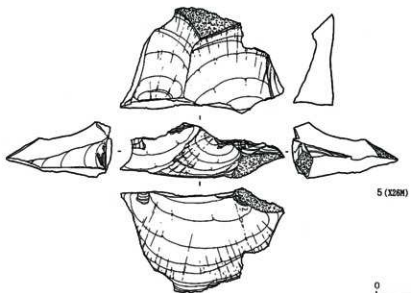
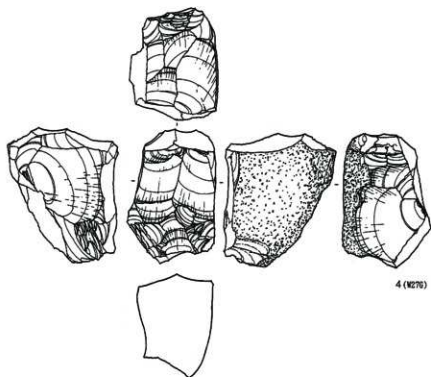
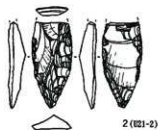
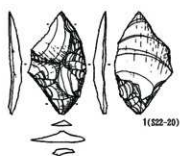
1 (表採) : 石斧である。厚手の角棒状の礫を素材に用いて、裏面側を平坦剥離によって大きく抉り取り、形状を整えた後に、裏面と正面に小形の平坦剥離を施し側縁(形状)を整形している。正面は原石面の湾曲によって、縦断面を見ると、刃部を薄く、基部を厚く作られている。

刃部は正面と裏面の両側から細かい剥離によって整えられており、刃刃となっている。刃縁は薄く、正面に摩耗痕が観察できる。

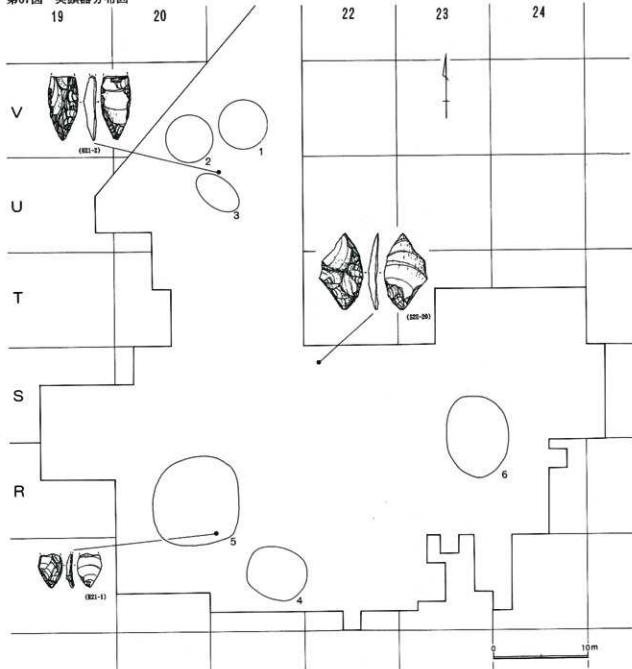
2 (Y27グリッド) : 先端及び側縁の一部を欠損する。表面の風化は進んでおり、細かい剥離面は観察不能である。横断面は菱形を呈している。

3 (ST31) : 先端・基端及び側縁の一部を欠損す

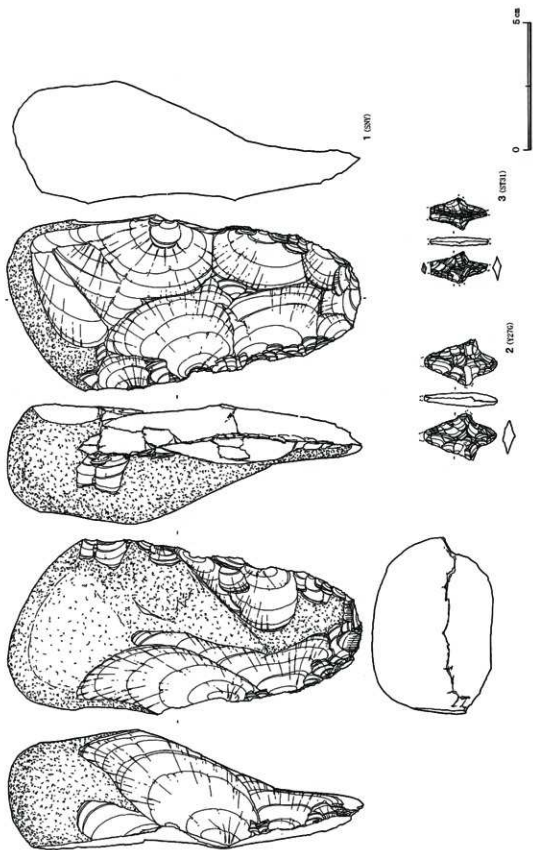
第66图 石器实测图(9)



第67図 尖頭器分布図



る。基部が器長の半分近くと長い。調整加工は丁寧に、
右側縁は僅かに鋸歯状になっている。



V. 縄文時代の調査

1. 縄文時代の調査概要

新屋敷遺跡C区の調査では、縄文時代早期から晩期までの土器片が出土しているが、その主体となるものは、中期の土器群である。遺構では、所謂「Tピット」と呼ばれる土壌が8基検出された。その他、住居跡等は検出されておらず、遺物の出土状態も散漫と分布する程度であった。

その中で、O-28区からは、埋没谷の黒色の覆土の中から復元可能な浅鉢の大型破片が出土した。遺構の存在が子期されたが、周囲を精査した結果、明瞭にその存在を確認することはできなかった。

また、早期の土器片は調査区北側のZ-30区周辺から、後・晩期の土器群は台地上から肩部にかけて分布する傾向にあった。

さらに、土器群は検出されなかったが、草創期の有茎尖頭器や石斧等の石器群が出土している。石斧は台地肩部においてソフトローム中より出土したが、その周辺からは他の石器群は検出されていない。有茎尖頭器は調査区北側の一段低い台地において、谷の覆土の中や、後世の遺構の覆土に混在して検出された。遺物の詳細は、第IV章で説明してある。

2. Tピット (第69図)

第55号土壌

R-S-29区にまたがって位置する。プランは船底形の長楕円形で、長径3.66m×短径0.82m×深さ0.8mであった。底部に5個のピットを持つ。ピットは3個が小さなピット状となっているが、2個は浅いものであった。主軸方向はN-3°-Wである。

第56号土壌

O-25区に位置する。プランは細長い長楕円形で、長径2.2m×短径0.41m×深さ1.0mであった。第23号墳の周溝と重複しており、主軸方向は、N-76°-Wである。

第155号土壌

R-23区に位置する。プランは細長い長楕円形で、長径2.6m×短径0.83m×深さ0.91mであった。開口部が一部崩落しているものの、非常に細長く深い土壌である。第35号墳の周溝と重複していた。遺物は早期の小破片が出土した。主軸方向はN-5°-Wである。

第180号土壌

O-16区に位置する。プランは長楕円形の船底形をした典型的なTピットである。長径3.3m×短径0.59m×深さ0.88mであった。第179号土壌と重複する。遺物は早期の小破片が出土した。主軸方向はN-40°-Eである。

第181号土壌

N-O-19区にまたがって位置する。プランは第180号土壌と同様に、長楕円形の船底形をした細長い典型的なTピットである。長径3.6m×短径0.6m×深さ1.0mであった。第72号溝と重複する。主軸方向はN-30°-Wである。

第187号土壌

O-21区に位置する。プランは、非常に細長い長楕円形の船底形をしたTピットである。長径4.0m×短径0.56m×深さ0.68mであった。第45号墳と重複する。主軸方向はN-9°-Eである。

第188号土壌

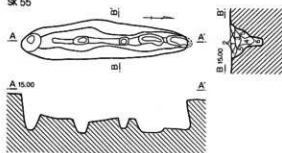
O-P-16区にまたがって位置する。プランは開口部がやや広い船底形で、底部が長軸上にハンクしている。長径3.24m×短径0.68m×深さ0.84mであった。主軸方向はN-20°-Eである。

第189号土壌

N-17区に位置する。プランは第187号土壌と同様に非常に細長い船底形で、底部が長軸上にハンクしている。長径6.7m×短径0.64m×深さ1.1mであった。主軸方向はN-13°-Eである。

第69図 縄文時代の土埴

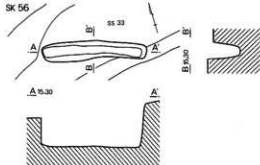
SK 55



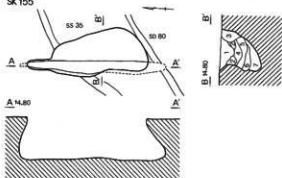
SK 55

- | | | | |
|---------|---------|--------|-----------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子少量 | 4 黒褐色土 | ロームブロック多量 |
| 2 暗黄褐色土 | ローム粒子多量 | 5 暗褐色土 | ロームブロック多量 |
| 3 黒褐色土 | ローム粒子少量 | 6 黄褐色土 | |

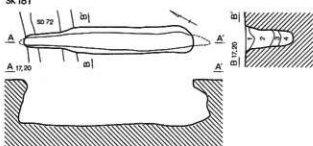
SK 56



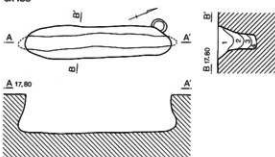
SK 155



SK 181



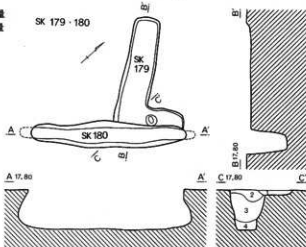
SK 188



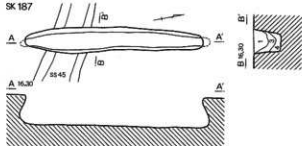
SK 155

- | | |
|--------|-----------------|
| 1 黒褐色土 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子・黒褐色土 |
| 3 黄褐色土 | ロームブロック |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子・黒褐色土少量 |
| 5 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒子少量 |
| 6 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒子 |
| 7 暗褐色土 | ロームブロック多量 |

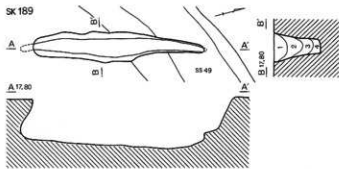
SK 179・180



SK 187



SK 189



SK 179・180

- | | |
|--------|-----------------|
| 1 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒子多量 |
| 3 黄褐色土 | ロームブロック・ローム粒子 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子 |

SK 181・187~189

- | | |
|---------|---------------|
| 1 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒子 |
| 2 黄褐色土 | ロームブロック・ローム粒子 |
| 3 暗黄褐色土 | ローム粒子 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子 |

0 2m
1/30

3. グリッド出土遺物

a) 縄文土器

縄文土器は早期から晩期までの土器群が出土している。主体は中期の土器群であるが、それぞれの時期で群分けして説明を加える。

第I群土器 (第70図1～18)

早期の土器群を一括する。

第1類 (1, 2)

燃糸文彩土器群である。細片が2片のみ出土した。何れも赤褐色を呈し、細かな縄文RLを施文している。2は底部付近の破片である。胎土には白色粒子と、長石、石英類を多く含む。縄文の特徴から、非草式に比定されるものと思われる。

第2類 (3～15)

沈線文系土器群を一括する。3～9は細沈線文で区画を施し、区画内に貝殻腹線文を充て施文するものである。区画は縦位の分割線の後、横位の区画線を施すもので、幾何学文の区画が施される。

10～13は細沈線文と凹線状の太沈線文とを施文するもので、14はやや太目の沈線文を横位に施文し、15は太沈線文のみを施文する破片である。何れも胎土に砂粒を多く含む、田戸下層式に比定される。

第3類 (16～18)

条痕文系土器群を一括する。16は鋸歯状の沈線文を施文し、多くの繊維を含む。18は16と類似した胎土であり、若干括れる器形を呈する。17は内外面に擦痕状の条痕文を施すもので、繊維を若干含む。16、18は茅山下層式から茅山上層式の段階に比定されるもので、17は条痕文系土器群の前半期に比定される。

第II群土器 (第70図19～21)

前期の土器群を一括する。19、20は諸磯式の爪形文系の土器群であり、平行沈線文の上に幅広の連続爪形文で、波状やレンズ状のモチーフを施文する。

21は集合平行沈線文で文様帯を多段に横帯分割し、同種の集合平行沈線文を、対向する矢羽根状に施文するもので、前期終末の十三菩提式に比定されるものと思われる。

第III群土器 (第70図22～第71図96)

中期の土器群を一括する。

第1類 (22～28, 133)

阿玉台・勝坂系の土器群を一括する。133は口縁部が屈曲する浅鉢で、口縁部文様帯に隆帯の楕円区画文を連結するモチーフを配し、隆帯に沿って半載竹管による2列の結節沈線文を施文する。推定口径は約40cm、器高は16.8cmである。胎土には雲母を多く含む、口唇部の作り等から阿玉台II式に比定されよう。

22～23は半載竹管による半円形状の平行沈線文でモチーフが描かれるものである。22、23は同一個体であり、縦位のパネル状区画文が彫りの深い平行沈線文で描かれる。24は内彎する口縁部付近で、隆帯区画内に三叉文を施す。何れも区画線に沿って細かな爪形文を施している。25は幅広の爪形文を施すものである。

26～28はやや粗いベン先状の連続刺突文でモチーフを描くものである。モチーフは刻み隆帯の区画内に、円形モチーフ等を描く。勝坂系の土器群で、所謂平戸尻I式段階に位置付けられよう。

第2類 (29～96)

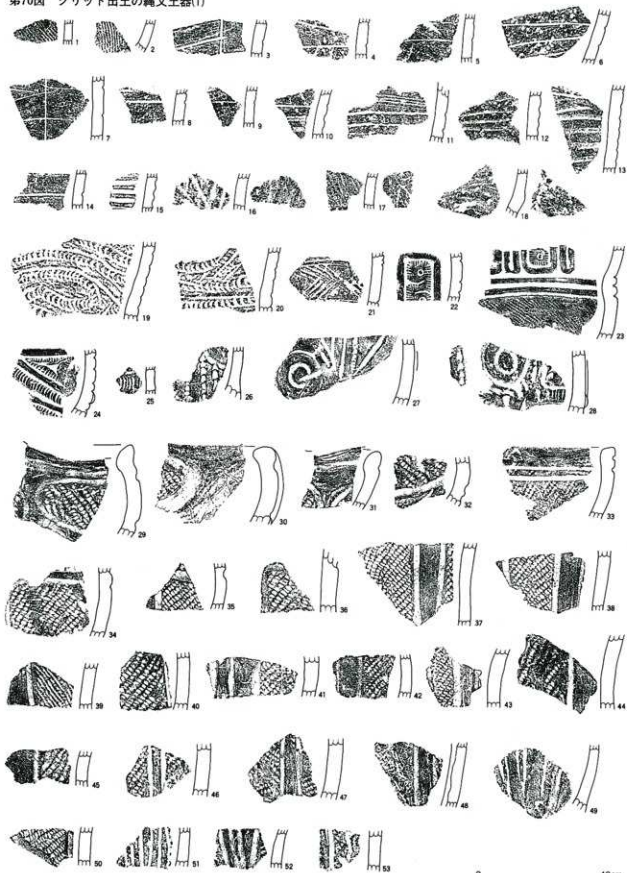
加曾利E式の各系統の土器群を一括する。29～53は口縁部文様帯を持つキャリパー系の土器群で、口縁部のモチーフは崩れて楕円文化しているものが多い。胴部破片は磨消懸垂文を持つもので、51、52の様に沈線文が多条化しているものもある。50は大きく蛇行する懸垂文が垂下する。

54～63は口縁部文様帯を持たない土器群で、胴部が括れる器形を呈し、沈線文でU字状文等を施文するものである。56は口縁部に太沈線文の渦巻文を施文するもので、沈線文上に円形刺突文を連続に施文するものである。59は口縁部の区画線内に円形刺突文を施している。

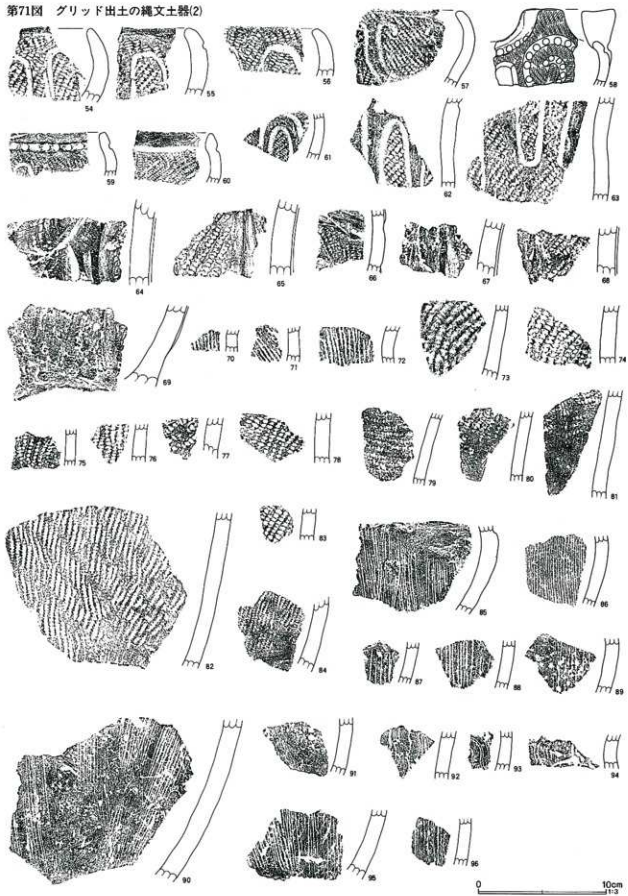
64～69は低い隆帯文のみを施文するものである。低隆帯を施文した後に、ナゾリを施し、縄文を施文するものである。

70～96は地文のみのもので、70～72は細かい燃糸文を施す。73～84は縄文地文で、85～96は条線地文であ

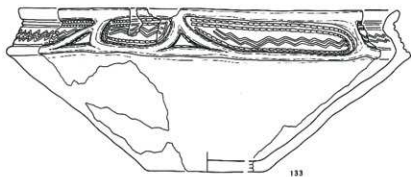
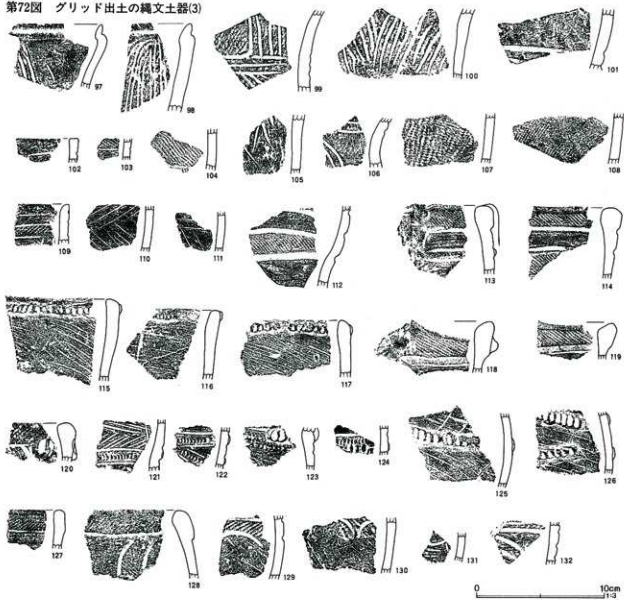
第70図 グリッド出土の縄文土器(1)



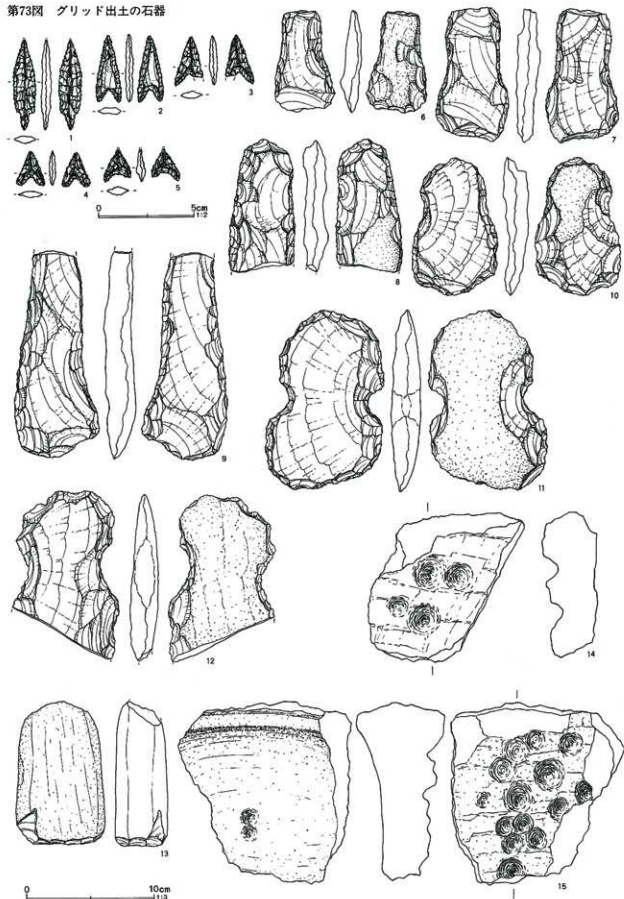
第71図 グリッド出土の縄文土器(2)



第72図 グリッド出土の縄文土器(3)



第73図 グリッド出土の石器



る。92-94は蛇行条線文が垂下する。

以上の土器群は、大半が加曾利EⅢ式古段階の良好な一括資料であるが、50、70-72は加曾利EⅠ式、58-60は加曾利EⅢ式新段階に位置付けられよう。また、隆帯文系の大半もこの段階に比定されよう。

第IV群土器 (第72図97~132)

後・晩期の土器群を一括する。

第1類 (97~112)

後期前半の土器群を一括する。97-100、105、106は胴部が緩く括れる深鉢形土器で、97、98は口縁部に凹線状の沈線文が巡る。モチーフは多条化した沈線文施文されるものが多く、新しい傾向にある。102-105は口縁の開く深鉢形土器で、磨消縄文を持つ。107、108は縄文を施文する破片である。おおよそ堀之内Ⅱ式段階に比定されよう。

109-112は後期中葉の器群であり、109は平行沈線文と磨消縄文を持つ加曾利BⅠ、110、111は綾杉状の沈線文を持ち、112は内斡して開く器形を呈する。加曾利BⅢ式に比定されよう。

第2類 (113~126)

後期安行系土器群を一括する。113、114は平口縁の深鉢形土器で、113は口縁部に隆帯が付く。115-117は紐線文系土器で、口端部に押圧状の刻みのある隆帯が貼付され、地文に粗い糸線を持つ。安行Ⅰ式に比定されよう。

118、119、121-124は波状口縁、120は平口縁の深鉢形土器で平行沈線文間に刺突文を施したり、刺突を施した貼付文が付く。125、126は胴部に押圧の施された隆帯が付く紐線文系土器である。安行Ⅱ式に比定されよう。

第3類 (127~132)

127は平口縁の帯縄文系の土器で、128は紐線文系の土器、129-132は胴部破片である。何れも地文がLRとなり、安行Ⅲa式段階の土器群と思われる。132は平行沈線文がやや曲線的に施文されており、大洞系の要素が見られる。

b) 石器 (第73図1~15)

石鎌 (1~5)

5が黒曜石で、他はチャート製である。1は中子の付く大型の石鎌であり、他は比較的挟りが深く入る石鎌である。1は縦4.7×横1.2×厚さ0.6cm、重さ2gである。2は縦3.5×横1.9×厚さ0.4cm、重さ1.4gである。3は縦2.67×横1.5×厚さ0.5cm、重さ0.8gである。4は縦1.7×横1.5×厚さ0.4cm、重さ0.6gである。5は縦1.7×横1.6×厚さ0.5cm、重さ0.4gである。

打製石斧 (6~12)

6-9は刃部の幅が広い撥形の打製石斧であり、10-11は中央部のやや頭側に、両側からの挟りがはいる分銅形の打製石斧である。殆どが頁岩製であるが、7は結晶片岩、11は砂岩製である。6は縦7.9×横4.8×厚さ1.5cm、重さ66.8gである。7は縦10.5×横5.8×厚さ1.7cm、重さ151gである。8は縦(10.5)×横5.2×厚さ1.9cm、重さ(146.9)gである。9は縦(16.3)×横6.7×厚さ2.1cm、重さ(274)gである。10は縦10.8×横6.8×厚さ2.1cm、重さ198.1gである。11は縦14.2×横9.5×厚さ2.4cm、重さ405.8gである。12は縦(13.3)×横8.5×厚さ2.2cm、重さ(267.6)gである。

スタンプ形石器 (13)

閃緑岩製の磨石で、頭部を欠損するが、下端が版面となっている。側面に底部からの細かい剥離が入る。底面は摩耗が進んでいる。縦(11.4)×横7.1×厚さ4.2cm、重さ(483.4)gである。

石皿・凹み石 (14、15)

15は石皿と凹石が兼用されている。石皿の機能が終了した段階で、凹石としての機能が主体化したものと思われる。14は緑泥片岩、15は多孔質安山岩製である。14は縦12.2×横11.5×厚さ4.4cm、重さ621.2gである。15は縦14.5×横13.7×厚さ7.0cm、重さ868gである。

VI. 古墳時代前期の調査

1. 調査の概要

古墳時代前期の遺構は、調査区のほぼ中央部に集中して集落遺跡が検出された。住居跡は上位段丘面から、その斜面部への移行部分に集中している。痕跡までを含めると17軒を検出したが、住居跡が分布する一帯は、農業試験場の関係で鬱攪状に造成されており、ローム面に掘り込んである住居跡でも覆土を殆ど持たないか、床面だけしか検出されなかった住居跡も存在する。住居跡は軒数が多く、隣接して存在するものや、主軸を違えるもの等あり、2時期以上に互って集落が形成されたものと判断される。

集落が存在する上位段丘面は、段丘の裾の部分に南東方向からと北西方向から谷が入り込んでおり、後期の古墳跡はこの埋没谷上に形成されるが、前期の住居跡群は埋没谷上には構築されていない。しかし、上位及び下位段丘面上に存在する古墳跡の周溝では、上位段丘面上に形成された集落の遺物が、何等かの原因で周溝内に持ち込まれたか、廃棄されたか、流れ込んだかの原因によって、検出される場合がある。

周溝内には、明らかに時期の異なる土器群が流れ込んでいる場合もあるが、完形に近い土器群や、流れ込みによるとは考えられない出土状態を呈するものも存在した。隣接するA区においても、周溝内に完形に復元される壺が2個体検出されており、同様な現象として捉えられた。

2. 住居跡

第13号住居跡（第75～77図）

M-N-25～26グリッドに位置する。南西側に第44号住居跡が隣接する。住居跡のプランは南北方向にやや細長い長方形で、長径5.75m×短径5.1m×深さ0.4m、主軸方向はN-14°-Eであった。

住居跡の中央部やや北寄りに炉を持ち、P1、P2、P3、P4の4本主柱穴を持つ。炉はほぼ円形で、長径0.79m×短径0.75m×深さ0.2mである。柱穴はP1＝

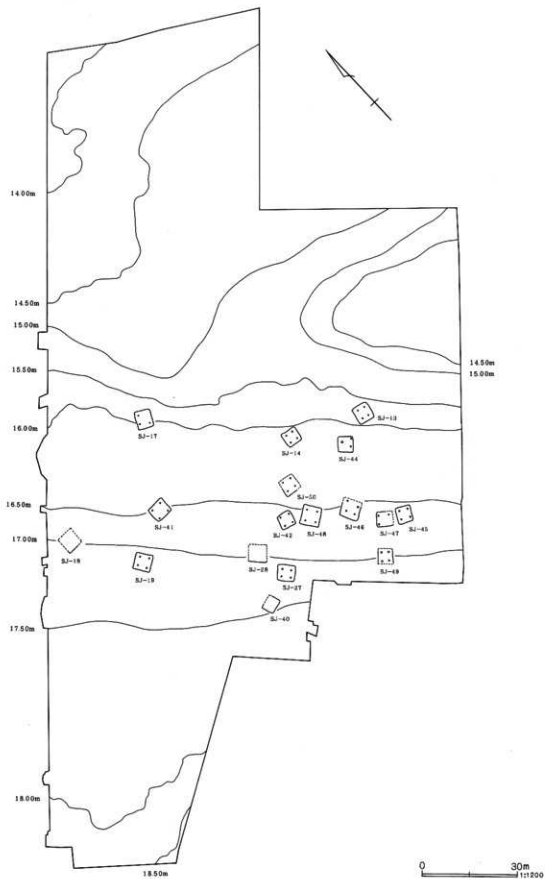
長径0.55m×短径0.5m×深さ0.55m、P2＝長径0.4m×短径0.40m×深さ0.4m、P3＝長径0.5m×短径0.5m×深さ0.45m、P4＝長径0.55m×短径0.55m×深さ0.45m、P5＝長径0.88m×短径0.45m×深さ0.3mであった。

炉の北側にピット状の落ち込みP5があり、覆土には焼土粒子が多量に含まれていた。壁溝は北西のコーナーを除いて全周する。南西コーナーは、第47号溝の攪乱を受けており、不明瞭となっている。

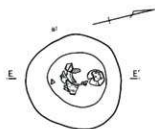
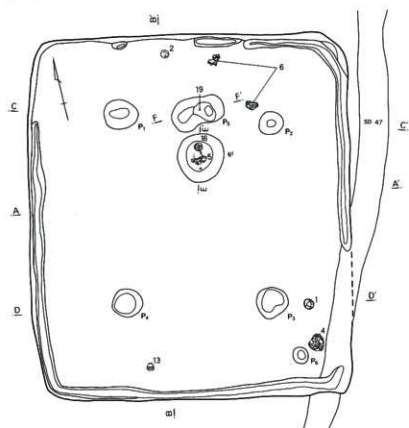
出土遺物は土師器が殆どで、土玉が4点である。土器は覆土中に多く存在するが、炉の中に器台16と、甕5か据え置かれた状態で出土しており、住居跡焼成時に炉に置かれたものと思われ、祭祀行為の可能性も考慮される。他には南西の壁際にやや浮いた状態で甕4が、床直では壺2、甕6、甕13か出土している。

1は複合口縁甕で、口縁は僅かに外反しながら開く。複合部は薄く幅広く、下端に接合痕を残す。内外面とも刷毛目調整の後、匳磨きか粗く施される。2は直口壺で、体部は下膨れでやや肩が張る。底部は小さく、上げ底気味である。外面及び口縁内面に細かな匳磨きが丁寧な施され、赤彩される。3は上げ底気味の壺底部。4・5・7は口縁が外反する甕で、4・5は体部外面及び口縁部内面に目の細かい刷毛目調整を残す。7の体部外面は匳削りされている。6はやや長胴の甕で、口縁はほぼ直線的に開く。体部外面上半に目の粗い刷毛目、体部外面下半及び内面に目の細かい刷毛目が施される。刷毛目調整の後、体部内面には匳磨きか施される。8・9は、口縁が屈曲する鉢である。8の口唇は面取りされ、体部外面は匳削り。外面及び口縁部内面は赤彩される。10は、台付甕の台部。11は、小形壺の底部か。底面に匳磨きか施されるが、内面の調整は粗雑である。12は甕と考える。口縁複合部下端は刷毛目調整工具でナデつけられている。内外面に粗く匳磨きか施される。13は小形丸底鉢の系属上にある鉢と考える。口縁部は極めて幅広く、下端の内外面に接

第74図 古墳時代前期の遺構配置図



第75図 第13号住居跡



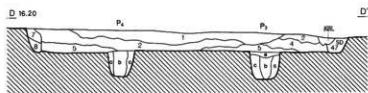
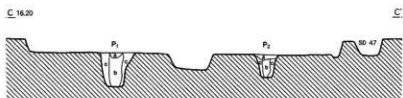
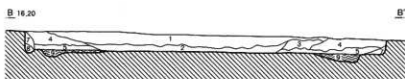
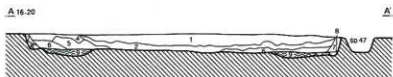
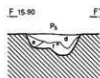
E_15.90



伊跡

- a 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子
 b 暗赤褐色土 焼土ブロック
 c 暗黄褐色土 ロームブロック

0 1m 1/30



S.J 13

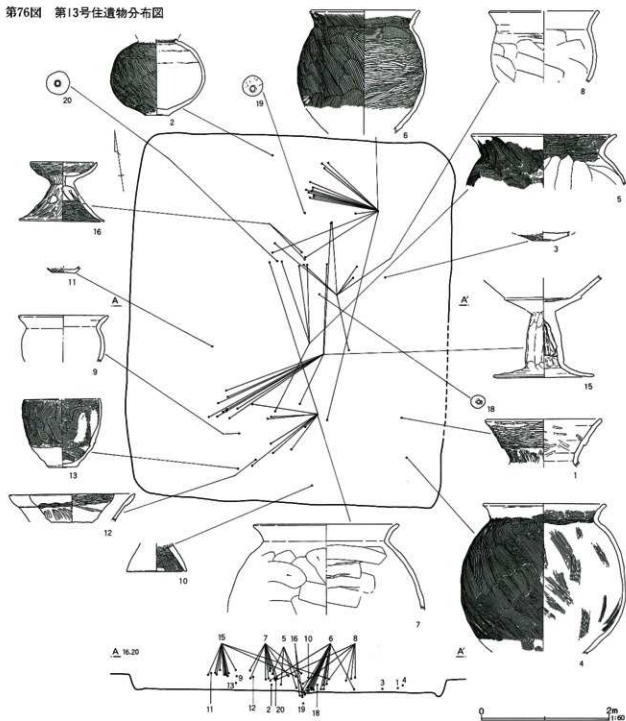
- 1 黒褐色土 ローム粒子、焼土粒子
 2 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒子
 3 黒褐色土 ローム粒子多量
 4 暗褐色土
 5 暗褐色土 ローム粒子多量
 6 暗褐色土 ロームブロック多量
 7 暗褐色土 ローム粒子少量
 8 暗褐色土 ロームブロック少量
 9 暗褐色土 ロームブロック、黒褐色土

ヒット

- a 暗褐色土 ローム小ブロック、ローム粒子
 b 褐色土 ローム粒子やや多量
 c 暗黄褐色土 ロームブロック多量
 d 暗褐色土 ローム粒子、焼土ブロック、焼土粒子多量
 e 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子多量
 f 明褐色土 ローム粒子、焼土粒子

0 2m 1/100

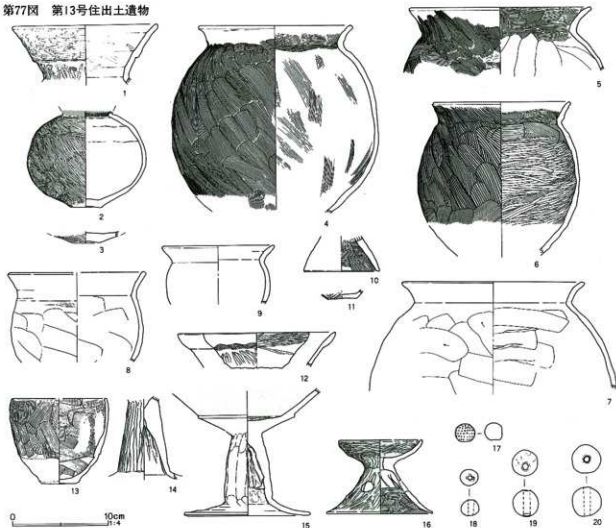
第76図 第13号住遺物分布図



合底を残す。口縁部外面及び内面には刷毛目調整が施される。14・15は柱状脚を持つ高坏で、共に裾部は、明瞭に屈曲して開く。14の柱状部は膨らみを持たず、上端の坏部との接合部には「ほぞ穴」に相当する部分が見られる。柱状部外面は篋磨き。15の柱状部は少し膨らみを持ち、内面には2段の粘土帯接合痕が見られ

る。柱状部外面は篋ナデ。坏部は下部に段を持って直線的に開く。16は小彩器台で、外面及び器受部内面は篋磨きが施され、赤彩される。脚部の透孔は3カ所。17～20は土玉である。17は細かな刺突が多く施され、1カ所に窪みを持つが、孔は持たない。

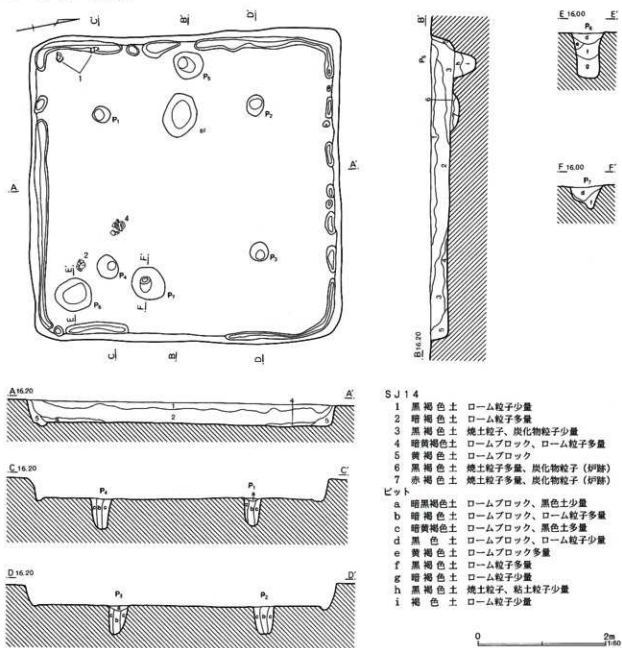
第77図 第13号住出土遺物



第13号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	15.3			ADF	C	にぶい橙	30	内面スス若干
2	壺			3.3	D J	B	にぶい褐	70	内外面口縁赤彩
3	壺			2.7	A B J	B	にぶい橙	20	
4	甗	16.3			D J	B	赤褐	60	内外面スス若干
5	甗	19.3			F	A	にぶい褐	22	体部外面スス、内面炭化物若干
6	甗	14.7			J	A	にぶい赤褐	70	やや長胴
7	甗	(19.4)			A J	B	にぶい橙	8	口縁、外面炭化物若干
8	鉢	(14.7)			F	B		5	口縁内面及び外面赤彩
9	鉢	(11.9)			A B	C	橙	25	
10	台付甗		(4.7)	(8.0)	B E J	A	にぶい赤褐	20	
11	壺?		(0.9)	3.0	A G F J	B	橙	28	
12	甗	(16.8)		(3.6)	A B J	B	にぶい褐	10	
13	鉢	(10.1)		9.0	F J	B	明赤褐	50	外面スス
14	高坏				A B I	B	橙		外面赤彩
15	高坏				A D I J	B	にぶい黄褐	70	全体赤彩
16	小形器台	8.8	7.8	11.2	D J	B	明赤褐	95	赤彩
17	土玉						にぶい橙		縦1.9cm×横1.8cm
18	土玉								外径1.9×孔径0.7~0.55厚さ1.8cm
19	土玉								外径2.7×孔径0.75厚さ2.8cm
20	土玉								外径3.0×孔径0.7厚さ3.0cm

第78図 第14号住居跡



第14号住居跡 (第78~80図)

N-23~24グリッドに位置する。東側に第44号住居跡、南側に第50号住居跡が存在する。住居跡のプランは東西方向に主軸をとるほぼ方形で、一辺4.9m×深さ0.4m、主軸方向はN-80°-Wであった。

住居跡の中央部西側のP1とP2の間に炉を持ち、P1、P2、P3、P4の4本主柱穴の構造を持つ。炉は東西に細長い楕円形で、長径0.7m×短径0.55m×深

さ0.2mである。柱穴はP1=長径0.32m×短径0.3m×深さ0.5m、P2=長径0.35×短径0.3m×深さ0.5m、P3=長径0.35m×短径0.3m×深さ0.5m、P4=長径0.4m×短径0.35m×深さ0.55mである。

その他、炉の奥にあたる西側にP5が、東壁に寄ったところにP7が存在し、P5=長径0.5m×短径0.45m×深さ0.4m、P7=長径0.55m×短径0.52m×深さ0.45mであった。